

アントニオ・ジェノヴェージ
「商業汎論—商業についての
一般的な論考—」(1757年)

奥 田 敬 訳

一橋大学社会科学古典資料センター

Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

目 次

訳者緒言	1
凡例	6
上品にして寛大なる読者へ『グレート・ブリテン商業史』総序	7
商業についての一般的な論考	9
商業の科学	13
商業の科学の諸部分と諸目的	13
政治経済の第1の目的：人口の増加	14
人口増加のための諸方策	14
政治経済の第2の目的，国民の富裕と勢力	18
農業，我々の諸便宜と我々の富裕の第1の源泉	18
国民の便宜・富裕・勢力の第2の源泉：製造業	22
国民の富裕と勢力の第3の源泉：商業	26
諸国民の国内商業に関する諸準則	28
イングランド人達がその上に彼らの商業を樹立し維持している諸原則	31
訳註	39

アントニオ・ジェノヴェージ

「商業汎論—商業についての一般的な論考—」(1757年)

奥 田 敬 訳

訳者緒言

1754年11月5日、世界で最初の経済学講座が南イタリアの王立ナポリ大学で開講された。そのときの初代教授が、ここに全文を訳出した「商業についての一般的な論考」(以下「商業汎論」と略記)の著者アントニオ・ジェノヴェージ (Genovesi, Antonio. 1713-1769) である。

「世界で最初」と簡便に呼び慣らしたが、これには不審のむきも多いかと思う。確かに、実質的に経済学的内容が講義されていたということなら、アダム・スミスのグラスゴウ大学での講義を初めとしてもっと早期の事例を幾つも挙げられるであろう。それどころか、既にスウェーデンのウプサラ大学では1741年9月16日にアンデシュ・ベルシュ (Berch, Anders. 1711-1774) が「法律・経済・商業 (iurisprudentiae, economiae et commerciorum)」の教授に任命されていたという。講座名から察するに講義も依然ラテン語で行われたらしいが、1746年にはスウェーデン語で『政治算術による王国・帝国経済の検定法』(*Sätt at igenom politisk arithmetica utröna länders och rikens hushåldhing*) という書物をストックホルムから刊行しているようなので定かでない。また、そもそもジェノヴェージの場合も正式の講座名は「商業と機械学 (commercio e meccanica)」であった。

しかし、誰が最初かということ自体は、ここではさほど本質的な問題ではない。この講座開設の劃期性をジェノヴェージが自負し、同時代人達もまたこれを盛んに喧伝した、その背景が重要なのである。つまり、これはイタリア啓蒙が「経済学」を中核として展開した、いや、18世紀中葉のイタリアの知識人達にとって「経済学」と「啓蒙」とは殆ど同義であった、ということの端的な現れに他ならない。

《18世紀の最後の四半世紀に至るまでは》すなわち1776年に『国富論』が世に出るまでは《経済学はイタリア人の科学であった》というシュムペーターの評言 (東畑精一訳『経済分析の歴史』第1巻, 335頁) は明らかに過褒であるけれども、18世紀のイタリア人達が「経済学」に注いだ情熱と関心は並ならぬものであった。1768年にはミラノでベッカリーア (Beccaria, Cesare. 1738-1794) が「公共経済学、または政治経済学 (Economia pubblica o politica)」を開講したのに続いて、72年にはモデナでパラディージ (Paradisi, Agostino. 1736-1783) が「市民経済学 (Economia civile)」を、そして1779年にはパレルモのセルジョ (Sergio, Vincenzo Emanuele. 1740-1810) とカターニアのマレルバ (Malerba, Vincenzo) が同時に「経済・農業・商業 (Economia, agricoltura

e commercio)」を講じ、1780年代に至るとパヴィア、ボローニャ、パドヴァ等の大学でも相継いで「公共経済学」の講座が新設された (Cfr. *Le cattedre di economia politica*, a cura di Massimo M. Augello et al., Milano: Angeli, 1988)。尤も、こうした18世紀後半段階での早咲きの制度化された(?)講壇からの経済学の啓蒙は、ジェノヴェージとベッカリーアという両雄を別格とすれば、概ねは群小の文化人達によってなされたのであって、イタリア啓蒙の主力部隊はそれぞれの地域が抱える改革の課題との格闘を通じて啓蒙の経済学を鍛えていったのであり、その主要遺産を——文献学的には問題を残すものの——19世紀初頭時点で集大成したものが、クストディ (Custodi, Pietro. 1771-1842) 編の全50巻の『イタリア経済学古典叢書』(*Scrittori classici italiani di economia politica*, Milano: G.G. Destefanis, 1803-1816) である。

では、何が一体それほどまでに彼らを「経済学」へと駆り立てたのか、彼らはそこに如何なる希望を託したのか、そして彼らの「経済学」とはどのような内容のものであったのか、——そうした疑問を解明するための重要な鍵の一つがこの「商業汎論」ではないかと思う。ここにはナポリ啓蒙の初発の形姿が明瞭に示されているからである。

「商業汎論」はジェノヴェージが(ラテン語ではなく)イタリア語で書いた著作としては2作目にあたる。第1作は、1753年に執筆された「学問と科学の真の目的についての叙説」(*Discorso sopra il vero fine delle lettere e delle scienze*)であり、これはフィレンツェの「農業学会(*Accademia dei Georgofili*)」の創設者モンテラティーチ (Montelatici, Ubaldo. 1692-1770) の著『農業を復興させるために最も必要な諸方策についての省察』(*Ragionamento sopra i mezzi più necessari per far rifiorire l'agricoltura*, Firenze: Gaetano Albizzini, 1752) のナポリ版刊行にあたって序文として添えられた。既にこの第1作において、人類史を「理性」——ジェノヴェージはそれを《普遍的な技術 (l'arte universale)》と呼ぶ——の進歩の過程とみなす啓蒙史観を踏まえて、空疎な思弁に耽るのをやめ《有用な学 (scienze utili)》に目を見睦く必要性が力説されていたのであるが、こうした主張を自ら実践する場としてジェノヴェージには翌年「経済学」講座が与えられたのであった。この講座におけるジェノヴェージの講義はやがて1765-7年にかけて2巻本で刊行される『商業、すなわち市民の経済の講義』(*Delle lezioni di commercio o sia di economia civile*, Napoli: stamperia Simoniana) に結実するのであるが、「商業汎論」はその萌芽の一つであり、南イタリアにおける「政治経済学」の形成を論じる上で逸することのできない文献である。

さて、「商業汎論」の初出は、ザノベッティ師 (Zanobetti, Giovanni Battista) の編集する《*Magazzino toscano*》誌 (Firenze) の1756年12月号に *Estratto del ragionamento sul commercio universale di Antonio Genovesi* として掲載 (pp.550-565) されたものであるが、これは要約にすぎず、全文は翌1757年の春に次のような表題の3巻本の書物の第1巻の巻頭に収められて発表された。『ブリストルの商人ジョン・ケアリー著、ナポリの弁護士ピエトロ・ジェノヴェージによってイタリア語訳されたグレート・ブリテンの商業の歴史。インティエーリ講座における商

業と機械学の勅任教授アントニオ・ジェノヴェージによる、商業についての一般的な論考と我が王国の経済に関する若干の評注を付し、チェルミニャーノ侯ロムアルド・ステルリッヒ閣下に献呈。……』(以下『グレート・ブリテン商業史』と略記)。3巻とも刊行年は1757年と表記されているが、実際には第2巻は1758年の4月、第3巻も同年末頃に遅れて出版された。

ところで、この『グレート・ブリテン商業史』の原典は表題によればジョン・ケアリー (Cary, John. d.1720?) の著作とされているが、実はこの間には少しく複雑な経緯がある。確かにケアリーは1695年に *An Essay on the State of England, in Relation to its Trade, its Poor, and its Taxes, for carrying on the present War against France* という書をプリストルで出版しているが、これは200頁程の小冊子であり章立ても全く行われていない。ところが、この書はそれから半世紀余り経た1755年に至って *Essai sur l'état du commerce d'Angleterre* という表題の下に全26章からなる2巻本950頁あまりの自由訳がフランスで匿名で刊行されるのである。その訳者というよりもむしろ著者というべき人物の正体はビュートル・デュモン (Butel-Dumont, Georges-Marie. 1725-1788)、形成途上の「百科全書派」と雁行してパリを《経済思想の伝播》の中心地としたヴァンサン・ド・グルネ (Vincent de Gournay, 1712-1759) のサークルの一員である。このサークルの意義と影響については、津田内匠教授の一連の研究、とくに『1750年代のフランス経済学の動き——“Economistes”直前の Economistes ——』、一橋大学社会科学古典資料センター Study Series No.1 (1982年) を参照されたい。

ビュートル・デュモンがケアリーを下敷きとした背景には、この「サークル」に共通した、イングランドと対抗しようとするフランスの国民経済的な生産力体系の創出という課題があった。そのためにこそイギリス重商主義文献の紹介・研究が盛んに行われたわけであるが、こうした目的からすれば、いわゆる「貿易差額説」を理論的に定式化した(訳註27参照)論者と目されるケアリーは絶好の素材といえよう。ケアリーは、毛織物業の利害を代弁して特権カンパニー、とりわけ東インド会社を批判した「固有の保護主義者」(小林昇)であり、その議論は外国貿易それ自体を問題とするのでは決してなく、あくまでも国民経済の体系的展開の最後の——しかし不可欠の——契機として生産力視点からの把握に努めているからである。そのような理論的主張が現実の政策に反映・転換せしめられえればこそイングランドは今日の盛運を得ることができたのだというのが、(おそらくはグルネに示唆された)ビュートル・デュモンの判断であった。そこで彼はイングランドにおける議会の役割に特別の関心を注ぐことになる。《グレート・ブリテンが商業上で達成した諸革命》の2つの原因として、ビュートル・デュモンは、《議会の法令》とその背後にあった《新たな製造業の成立》に代表される社会経済的な諸変化を指摘している (Avertissement. pp.6-8)。ケアリーの自由訳が原著の数倍の分量に膨れ上がったのも、ひとつにはこの「議会」と「製造業」に関するその後のさまざまな資料の追加がなされた結果である。

ジェノヴェージの『グレート・ブリテン商業史』が底本としたのは、以上のようなビュートル・デュモンによって改訂されたケアリーであった。この書物に対するジェノヴェージの評価は「商

業汎論」本文の冒頭からも早速窺われるように極めて高い。ジェノヴェージもまたイングランドを模範として国民経済の発展の処方を与えようとするわけだが、永年のスペイン支配からの独立を1734年に漸く達成したばかりの新興国家ナポリ王国に生を享けた彼にとっては、ビュートル・デュモンの場合以上に自国の後進性の自覚は痛切であり、「経済学」の意義そのものからしてもさらに多くの語を費やして説かねばならなかった。『グレート・ブリテン商業史』が全3巻1500頁あまりの大部となったのもかかる事情のしからしめるところであったろう。

『グレート・ブリテン商業史』の構成は以下のようになっている。*印を付けたのは、ビュートル・デュモンのケアリー自由訳ではなく、『グレート・ブリテン商業史』において追加された箇所である。尚、[]内は「B刷」(凡例参照)の頁付けである。

第1巻

- *ロムアルド・ステルリッヒへの献辞(頁付なし、16頁分。「B刷」には欠落。因に、ロムアルド・ステルリッヒはナポリ王国北辺のアブルッツィ地方のキエーティにあって啓蒙思想の普及に努めた開明的貴族であり、ジェノヴェージとも親交があった)
- *「上品にして寛大なる読者へ」(ジェノヴェージによる総序) pp. I-VI [III-VI] .
- *ジェノヴェージ「商業汎論」 pp. VII-CVIII [VII-LXXVIII] .

【ビュートル・デュモンの「緒言」、ケアリーの「国王陛下への献辞」「イングランド議下院への献辞」「序」は省略されている】

ケアリー「イングランドの国内商業と外国貿易の現状、第1部。国内商業」第1～10章(農業・牧畜業・製造業についての叙述が中心) pp.1-406 [1-351].

第2巻

- *「読者へ」(ジェノヴェージによる序) pp. I-XVII [III-XX] .
- ケアリー「イングランドの国内商業と外国貿易の現状、第1部。国内商業」第11～13章(製造業育成についての叙述が中心) pp. 1-206.
- *ジェノヴェージ「巨富の力と効果についての哲学的論考」 pp.207-268.
- *トマス・マン「外国貿易によるイングランドの財宝」(ジェノヴェージ訳) pp.269-444.

第3巻

ケアリー「イングランドの国内商業と外国貿易の現状、第2部。外国貿易」第1～3章 pp. 1-133 [3-135].

- *「1660年のイングランドの大航海条例」(ジェノヴェージ訳) pp. 134-144 [136-146].
- ケアリー「イングランドの国内商業と外国貿易の現状、第2部。外国貿易」第4～13章 pp. 145-472 [147-474].
- *ジェノヴェージ「公共の信義(fede pubblica)についての論考」 pp.473-505 [475-507].

また、このほかにもジェノヴェージは3巻全てに互って翻訳部分の本文の下方に小活字組でときには10数頁にも及ぶ「評註」を付け加えている(第1巻には27箇所、第2巻には10箇所、第3

巻には27箇所)。これらのジェノヴェージによって追加された部分を読むと、彼が当時において可能な限りの経済学的諸文献を博搜し、それらを消化・吸収すべく格闘している様がまざまざと感じられるのである。以下の拙訳に付した訳註も、そうした彼の努力の跡を一端なりとも伝えることを主眼としている。

「商業汎論」は、『グレート・ブリテン商業史』の巻頭に置かれ、その総論的な役割を果たしているわけであるが、同時にこれは当時彼が行っていた「経済学」の講義の受講者達には一種のマニュアルともなったはずである。現物は未だ確認されていないが、「商業汎論」の部分だけが別刷りされて流布していたのではないかという推定もなされている。ローマ数字による頁付けがなされ、また末尾に《第1巻の終わり》という不可解な文字が印刷されていることなどからしても、かなりその可能性は高い。ともあれ、確実にいえることは、この『グレート・ブリテン商業史』の出版準備と並行してジェノヴェージは末尾に《1758年6月10日》の日付のついた『商業原論』(Elementi di commercio)と題された講義録の手稿をまとめており(Biblioteca Nazionale di Napoli, XIII,B,92)、両者には重複する箇所が少なくないということである。一例だけ挙げれば、「商業汎論」最終節「イングランド人達がその上に彼らの外国貿易を樹立し維持している諸原則」の文章もこの講義録の第1部6章「外国貿易を促進するための一般的諸原則」(ff.55-62r.)と殆ど同一である。そしてこの講義録『商業原論』こそがのちの『商業、すなわち市民の経済の講義』の原形となるのである。

尚、未だに被見の機を得ていないのだが、この『グレート・ブリテン商業史』には次のような独訳が存在するという。*Anton Genovesi's, der Handels-Wissenschaft und Landwirthschafts-Mechanik Professors auf der Universität Napoli, oekonomisch-politischer Commentarius zu Johann Cary's Negocianten zu Bristol, historisch-politischen Bemerkungen über Gross-Britanniens Handel und Gewerbe, wie auch andre dahin gehörige Dinge. Verdeutscht von M. Christian August Wichmann, Ehren Mitglieder der Leipziger oekonomischen Societät. Leipzig: Johann Samuel Heinsius, 1788, 2 Bds.* 一冊の書物が英・仏・伊・独と次第に変容を遂げながら伝播していったわけである。18世紀における全ヨーロッパ的な規模での「経済思想の交流」の様相を如実に示す興味深い事例といえよう。

凡 例

1. 本冊子は、

Storia del commercio della Gran Brettagna, scritta da John Cary, Mercante di Bristol, tradotta in nostra volgar lingua da Pietro Genovesi, Giureconsulto Napoletano. Con un ragionamento sul Commercio in universale, e alcune annotazioni riguardanti l'economia del nostro Regno di Antonio Genovesi, R. Professore di Commercio e di Meccanica nella cattedra Interiana. Dedicata a S. E. Romualdo Sterlich de' marchesi di Cermignano. In Napoli M.D.CC.LVII. Per Benedetto Gessari, Con licenza de' Superiori. E privilegio. 3 voll. in 8° (cm. 11,5×18). <Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University: 貴 A-B592>

所収の「商業汎論」(Ragionamento sul commercio in universale) の全訳である。

但し、上記の一橋大学社会科学古典資料センター所蔵本は、2種類の初版本が知られているうちの、後から活字の間隔を詰めて紙型を組み直したと推測されている方の所謂「B刷」であり、第1巻の総頁数が100頁以上少なくなっている他、テキストにも僅かながら異同が生じている。そのため、訳出にあたっては、以下の諸刊本も参照した。

- ① Antonio Genovesi, *Scritti economici*, a cura di Maria Luisa Perna, Napoli: Istituto Italiano per gli Studi Filosofici, 1984, 2 voll.
- ② Antonio Genovesi, *Autobiografia, lettere e altri scritti*, a cura di Gennaro Savarese, Milano: Feltrinelli, 1962.
- ③ *Riformatori napoletani*, a cura di Franco Venturi, Milano-Napoli: Ricciardi, 1978 [La letteratura italiana. Storia e testi, vol.46, Illuministi italiani, tom. V].
- ④ *Scrittori classici italiani di economia politica*, a cura di Pietro Custodi, Parte moderna, vol. IX, Milano: G. G. Destefanis, 1803.

尚、訳註作成に際してもとりわけ①の詳細な註解からは裨益されるところが多であった。

ここに記して感謝する。

2. 原書では脚注の形式になっているジェノヴェージ自身の6箇の原註(a～f)は、訳稿では当該段落の後の位置に移した。訳註は算用数字で示し、末尾に一括しておいた。
3. 原文でイタリック体の部分は、書名等の場合を除き、ゴチック体で示した。
4. 訳文中の丸括弧()はジェノヴェージ自身が原文で用いている記号である。ダーク——は原文では用いられていないが、訳文では文脈を捉えやすくするために適宜使用した。角括弧[]内は訳者による補足である。また原語を示すのにも角括弧を用いた。
5. 訳者は以前「商業汎論」の3割程度の部分訳を試みたことがある。「アントニオ・ジェノヴェージ〈外国貿易論〉——『グレート・ブリテン商業史』第1巻所収「商業汎論」からの抄訳と解題——」、『三田経済学研究』第33号(1986年)。訳文にはかなり手を加えたが、書誌的解題と訳註には事柄の性質上重複する部分が多いことをお断りし、御寛恕を願う次第である。尚、「商業汎論」執筆前後のジェノヴェージの思想とその背景については(現時点から見ると誤謬や不備も目立つのであるが)、拙稿「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成——アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論」とその周辺——」(上)(下)、『三田経済学雑誌』第79巻5号—6号(1986-1987年)も併読いただけると幸いである。

アントニオ・ジェノヴェージ
上品にして寛大なる読者へ
『グレート・ブリテン商業史』総序

現今におけるイングランド人達の商業の偉大と富裕について考察しながらもその諸原因を見究めぬ人々は、これは単なる偶然の所産や一時の運だと考えたり、あるいは、これは全てあの国民の性向や国土の地理的位置や風土などから生じたのだと考えてしまうことであろう。かかる謬見から目覚めるには、ここに上梓する『歴史』を読むにしかない。さすれば、こうした政治的現象の真の原因は彼らイングランド人の胸に偶然に宿ったような類のものでは断じてなく、まさしく商業と海運の基礎を固めるために彼処で実践された特別な技術と勤勉とであったことを理解するであろう。なぜなら、彼らの著作家達から容易に読み取れるように、イングランド人達もつい2世紀前までは、その性向も今日と変わらず——また今後も永久に変わらないであろうが——、同じ島に住み、最初から今と同じ空・同じ気候の下にあったにもかかわらず、それなくしてはいかなる文明社会も存続できないような種類のものを別とすれば、商業も製造業も有していなかったのである。というのも、未だ彼らは、やがて認識し実践することになった諸原則や諸技芸を知って採用するに至っていなかったからである。そこで本書の繙読から得られる第1の成果は、この国民が経済のあらゆる分野において、今や誰もが認めているあの偉大さの高みに到達すべく採用した弾機と梃子が如何なるものであったかが分かることである。しかしながら、この最初の単純な観察に留まってしまってはならず、さらに進んで、他のあらゆる国民もまた、その住む地方や周辺地域との適切な釣合を保つならば、同じ経済[学]を採用して、それ相応にイングランド人達と同様の偉大で豊かな商業を得られるのだということに気づくべきであって、これがこの『歴史』の読書から獲得すべき第2の成果である。これは本来、読書が怠惰で役立たずで自分の利益にも共通の利益にも不注意な人間の一種の暇潰しでないならば、あらゆる書物の読書から得られるはずの成果なのだが、歴史書や政治や経済の書物の読書から引き出せる主要な成果であることには一点の疑いもない。というのも、もし、古代の共和国や現在の著名な諸国民の古典的な著作家達を読むことを誇りとする全ての人々が、社会にとって最も必要な市民の哲学 [la filosofia civile] というこの目標のみを志していたのであれば、我々の間には今よりももっと多数の修練を積んだ者達が存在し、この哲学ももっと高い水準に達していたはずだからである。そして、もしもこれらの研究がもっと一般に賞味されていたならば、人文系の学校の生徒達の多くが、人間は現実の存在であって空想上の存在ではないのだから、言葉より事物で、空想的な観念や言葉とではなく他の現実の人間や事物とともにしか生きてはいけないうのだ、と考えを改めていたであろうし、空想的な研究や不毛な言葉の氾濫が今のように多数の信奉者を得ることもなく、彼らの労苦はもっと重要なより良い用途に費やされていたことであろう。だが、私の本題に戻ることにしよう。私

は言いたいのだが、ブリストルの商人ジョン・ケアリー氏によって前世紀の末頃に書き著され最近あるフランス人によって我々の時代にまで及ぶ大增補がなされたこの『歴史』を私が翻訳したのは、他にもない前述の2つの目的、とりわけ第2の目的のためである。同じ理由から私はそこに若干の「評註」を追加したのだが、それらがどのようなものであろうとも、その大部分は経済の研究に関するものである。さらにまた、商業の科学ないしは経済の科学と呼ばれるこの科学の性格を明らかにし、その諸原理と目的を示す「論考」も追加した。ところで、翻訳と追加に関しては、双方ともにしかるべき最終的な仕上げができなかったということを御承知おき願いたいのである。というのは、印刷が開始されて間もなく翻訳者¹⁾が重い胸の病に倒れたからであって、瀕死のところを奇跡的に脱したものの彼の生命に関しては未だに予断を許さない状態なのである。かくして私は単独でこの重荷を背負うことになったのだが、その他の夥しい雑事にまで追われて、少しずつ原稿を印刷所に送りながら執筆することしかできず、出版やこうした題材に求められるところの多くの周知の事柄に対してさしたる配慮も払えなかったのである。最後に、この『歴史』が全部で3冊からなるということも、知っておいていただきたい。これはその第1冊であり、グレート・ブリテンの国内商業の歴史と、その全部門が微細に至るまで含まれる。第2冊は、諸国民の収入と維持のための農業に次ぐ第2の基礎である製造業を促進するのに最も適切で最も強力な諸手段を提示するであろう。そして最終の第3冊は、外国貿易や海運や植民地を記述するであろう。ともあれ、私のこのささやかな贈り物を御嘉納され、有益な素晴らしい研究でもある市民の哲学を愛好されんことを。お元気で。

商業についての一般的な論考

アントニオ・ジェノヴェージ

人類の歴史が我々に教えるところでは、様々な技術や科学——すなわち、実践的な事柄の体系や純粋な認識の体系——が生じる以前に、先ず、利益なり知識なりを欲した人々の個別的な経験や試行があった。つまり、技術や科学としての幾何学や医学や天文学の成立には、幾何学的・医学的・天文学的な個々の経験が先行していたのである。というのも、技術や科学は順序立ち互いに調和する多数の規則の連鎖のことであり、初めに経験や観察によって生みだされた個別的な規則があって、しかるに後にそれらの調和的な連鎖があるわけである。商業や経済というのも、人々の間で太古以来行われてきた事柄の一つである。であるから、これに関する経験や観察は夥しく、様々な時代に殆どあらゆる諸国民によってなされてきた。ここから商業と呼ばれる技術または科学が生まれたのであり、そこには我々が経済の哲学と称するところの全ての科学が含まれている。しかしながら、この科学——もしそう呼びたいれば、技術といってもいいが——は、これを保持していた古代人の間では魂の狭量さや知性の脆弱さゆえに用心深く守られ、他の全ての技術の場合と同様、ただ伝統によってのみ後世に伝えられたのである。今日に至って漸く諸国民はこの科学について著述をなし、これを共通のものとする勇氣と能力を持つようになった。だが、諸国民の全てがそうなのではない。イングランド人・オランダ人・フランス人・スペイン人といった若干の国民だけにすぎない。

そこで、こうした経験を十分に持たないか、または、こうした経験から経済の技術や科学を作り出すことができなかつた他の諸国民がそれらを学ぶには、より熟達した賢明な諸国民によって与えられた商業の諸体系を読むだけで全く充分のように思われるかも知れない。だが、ある技術を完全に習得しようと望む者達にとって、一般的な諸規定とそれら相互の関連をただ単に知ることと、更に進んでそうした諸規定が生じた原因や理由を理解することとは別の事柄である。なぜなら、要約されてしまった技術というものは無味乾燥なものだが、そうした技術が生じた原因の分析は豊かな内容に満ちていて、習得さるべき事物に関するいかなる疑問の余地も残さないからである。それゆえ、ある国民の間に商業の科学を植えつけ定着させようと欲するならば、この科学を大いに実践し展開させている諸国民の商業の歴史を示す以上に有益なことはない。そういう次第でフランス人達は賢明な諸国民が書き著した商業に関するあらゆる書物を、とりわけ経済や商業も含む諸技術の起源や発達や完成を扱っているものを自分達の言語に翻訳するようになったのである。さて、多くの人々がそれぞれの国民の商業の歴史に関して書き著したのであるけれども、私の判断によれば、前世紀の末に『イングランド商業史』を著したケアリー氏以上に商業の発達や衰退の諸原因に深く踏み入った人は他に誰もいない。この歴史書は、その後、別人の手によって現代に至るまでの続きが書かれた。ユエ氏の『オランダ商業史』²⁾やサヴァリー氏の『辞典』³⁾

のように、ある国民が繁栄せる商業を有していたと述べ、その様々な領域を列举し、色々な輸出品や輸入品の項目を指摘しはするが、そうした商業が発生し、成長し、維持された真の諸原因を示さないのでは、我々に与えられるものは歴史の形骸であってその精神ではなく、これでは殆どあるいは全く役に立たないのである。リカールの『アムステルダムの商業』⁴⁾はもう少しばかり進んでいて、オランダの商業上の諸規則についても記述している。とはいえ、商業を促進するためにオランダ人達が採った諸方策に関してはごく簡単にしか触れられていない。スペイン人の2人の学者ウスターリスとウリョアは遙かに思慮深く有益な著述を行った⁵⁾。というのも、彼らはスペインの商業的衰退の全ての原因に視線を向け、その再建のためのあらゆる真の方策を教えたからである。

こういう次第であるから、これらの著作を我々の言語に翻訳しようと企てる者がいたとすれば、その者はイタリアに対して多大なる貢献をすることになるだろう。本来であれば、これはトスカーナ人によってなされるのが望ましい。その理由は2つある。[第1に]彼らは良い翻訳者にとって不可欠な素材と技術を心得ているからである。[第2に]全てのイタリア人のうちで彼らが最も良く我々の言語——あるいは彼らの言語か、この点について私は争うつもりはないが——を書くことができるからであり、これは今日のような文化的な時代にあつては、読まれることを望む者にとっては疎かにできぬ事柄である。彼らはロック氏の貨幣とそれに付随した様々な事柄を論じた書簡の優れた翻訳⁶⁾を出しており、またトリュブレー師の著作のこれも見事な翻訳⁷⁾を提供しているのであるから、同様にして、商業や経済を扱ったイングランド・オランダ・フランス・スペインの主要な書物を我々の俗語に移し替えるという高貴かつ有益な仕事に彼らが勤しんでくれることを願いたいものである。いかなる技術を習得する場合でも最良の道は実践することであることを私は知らぬわけではない。単に聞いたり読んだりするだけのものではなく、見たり行ったりするものこそが我々を動かし教育するのである。そして、我らが高貴なる君主の慈悲とインティエリ氏⁸⁾の寛大さによってこの困難な職務を命じられた以上は、私も年齢と能力の許す限りこうした道を喜んで選ぶであろう。だが、他になすすべをもたぬ人々には、聞いたり読んだりする以外に補いようがない。さらにまた、聞いたり読んだりするということは、商業の実践しか知らない人々にとっても大いに有益であろうことを付け加えておこう。こうした人々は商業の実践を先祖からの遺産として何らの反省もなく受け継いでいて、一般に職人達がそうであるように、原理や目的、また、一般的な知識を知ることなくそれを営んでいるだけであつて、私的な利害の諸原則を脱してそれを文明社会の全体に適用することができない。というのも、私は以下の点を知って欲しいからである。こうした知識は単に商人だけがわきまえるべきものではない。むしろ、あらゆる階層中で商人はこれを理解することが最も少ないであろう。この知識は、私的あるいは公共的な経済のうちで何らかの活動をしている全ての人々にまさしく関連するものである。だから、先ず家長達が、次に共同体の全ての役人達が、そうして君主の財政に係わる者達が、それぞれの家や共同体、そして国民全体と君主の利益を増大せしめるためにこれを学ばねばならないであろう。そ

して、とりわけ家長達や行政官や土地監督官や財政官達は、自分達の治めるところの事柄を改善しようと努めてはいるものの、それは単に実践を通じてであったり、我々全てが学んだような先祖伝来の教育機関によってであるのだから、自己流に学ぶことと他人から訓練を得て学ぶこととの区別、それ以上になお、運まかせで事にあたることと原則をわきまえ熟慮をもって事にあたることとの区別をつけねばならない。偶然に建築家達の仕事を観察してただけで他のいかなる知識がなくても建築家になることを習う者もいることは確かである。だが、成功する以前に彼は数限りない建物を造り間違え、壊さねばならぬはずである。これは彼の実践がしかるべき確実な建築学の知識によって導かれていれば避けられたであろう。なぜなら、こうした知識なしに彼が仕事をしても、正しい比例を見出すのは困難だからである。比例の知識と規則を用いれば困惑することはない。であるから次のことを知らねばならない。何であれ目的をもった活動を行うにあたっては、機械の操作のようなものであれ、政治に関するものであれ、その目的をうまく達成するためにはしかるべき原則と比例が欠かせないのであって、そうした原則を貴方達が疎かにするならば、偶然や運によるのでもないかぎり貴方達は目的に到達できない、ということ。そこで例えば、家族を正しく善く管理しようとするためには、多くの様々な事柄を、そのそれぞれの目的についてもそれら全体としても考慮せねばならず、そこに至る諸手段やそのなかで最適なものを選択を考えなくてはならない。多くの技術や科学が学ばれねばならず、先ず家族の成員達が我々を悪しき見本とすることなく、徳と勤勉の渝わらぬ学校とみなすように自分自身を治める術を、次には妻を治め子供達を養い教育する術、そして使用人や従者達に一つの目標に向かって義務を遵守させる術を学ばねばならない。平穩・繁栄・栄光といった家族の真の目的をしっかりと見据え、宗教・徳・勤勉・勤労がそこに導く手段であることを認識しなくてはならない。そしてそれらの手段のうちから場所と時宜に叶ったものを選択し、断固としてそれを採用できねばならない。のみならず、賢明なる家長は自分の財産を把握し、農耕を管理して所有地の土壤に最も適した作物や時代の需要に応じた作物を選択したり、牧畜を指揮したり、農産物の販売を促進したりして、財産を改良・増大できるような知識をもっていなければならない。いまや明らかなように、こうしたことは、結果はともあれあらゆる家長によって行われていることである。だが、こうした様々な事柄について理論的認識を全く欠いたままでも常にうまくやっているとすることはありえない。これらの事柄はどれ一つとっても巧みに実行するのは難しい事柄であるし、すべてを一緒にともなれば、困難極まりない。

同様のことが共同体を運営する人々についても言うことができる、いや言わねばならない。但し、共同体が家族より大きいその分だけ、彼らの仕事もより困難であり、それをうまくやろうとするにはより多くの認識と技術が要求される。さてそこで注意しておきたいのは、己れの家族や祖国を、したがってまた自分自身を意図的に破滅させようと謀るほどに不正不信な家長や共同体の役人であろうとはよもや思われたいということである。にもかかわらず、彼らの働きによって多くの家族や共同体 [università] が屢々破滅している。これが悪意から来るとはありそうもない

ことだとすれば、技術や思慮や認識の不足以外に責を帰することはできない。この不足は以下に述べるような研究によってなんとか補いうるものであるから、私は、そうした研究を祖国に普及させ、可能な限りの方途を尽くして同胞市民にそれを享受せしめようとする人々は、同胞にこの上ない恩恵をもたらすものであると確信する。仮にバルトロメオ・インティエーリ氏が我々の大学に経済および機械学の講座を開設するという類稀なる好事のほかは我々のために何もなさなかったとしても、ただこの一事のみをもって、氏が我々から永遠に賞賛され、人類にとって最も偉大な恩人の一人として、毎年その功績を賞賛と感謝の辞で記念されるであろうことは確実である。というのも、この開設の報に接したり、商業の技術や科学というものがあるということを聞いただけでも、我が国民のうちの勉強熱心な人々は多大の好奇心に満たされたく、早くも大きな効果が現れてきているのは疑いえないことだからである^a。大勢の人々がこの科学について書かれた書物を捜し求め、それを熱心に注意深く読んだし、読みつつある。そのため書店、とりわけフランス書を取り扱う書店は、絶え間なく書籍を取り寄せても殆ど間に合わず、たまたま入荷できてもまだ充分ではないと多くの書店が常に悲鳴を上げているほどである。科学や技術の起源・発達・進路というものを心得ている人々には、これが民衆の間にかかる科学を植え付け普及させる端緒として、どれほどの、また、どんな意味をもっているかが看取できよう。他の人文諸学科と比較してこの科学の発達を論じることが許されるなら、私はその発達は迅速かつ顕著なものとなるであろうと予言する。というのも、私の知る限り、他のいかなる科学も、我々の間でのこの科学の如きかくも多数の信奉者、知への熱意にかくも燃え立つ信奉者を、その始まりにあたって見出した試しはなかったからである。

[原註] a. ここで述べられている恩恵とは国民全体に関連しており、私はイタリア全体のことを言いたいのである。しかし、著者たる私はその他にも特別な恩義を氏に負っているのであって、いかなる時も、いかなる逆境も幸運も、人間の意志のいかなる変化も、いかなる非理性的な情念も理性的な情念も、氏を忘却せしめることは決してできぬであろう。それらの恩義を私は渝わらぬ感謝の証しとして全世界に知らしめたい。というのも、氏からは貴重な友情に与り、新たな講座の担任者に指名されるなど、他にも数え挙げきれぬほどの恩義を被ったのであるが、氏に対して抱いていることを表明したい最大の比類なき感謝は、この科学について氏から最初にたいへん素晴らしい手ほどきを受けたことであって、その後も絶えることなくいただき続けた御教示と刺激と父親のような励ましのなかで、私はこの研究に着手し、他の何物からも決して得られぬような喜びと満足とをもってこれに携わってきたのである。

そこで、この科学がまさしく一つの科学であるということ、すなわち固有の確実な諸原理を有するものであり、それらの原理がうまく組み合わせられれば固有の確実で実用的な結論を導き出せるものであり、その結論が正しく適用されれば真実の効用を有するのであるが、その結論に背くならば民衆に多大な被害を実際に及ぼすものであること——このことを私はこの「論考」で示したいと望んでいる。もとより私はこれを完璧に論じきることはできないであろうが——それには

ゆうに一巻の書物が必要であろう——、こうした問題に不慣れな人々にも、議論や実例を通じて、この科学が私の言うとおりのものであること、そしてこれを軽視すれば大変な被害を被ることになるが、これを適用するならば必ずや多大の利益をもたらすものであることが明らかになるような小論を提供しておきたい。では、前置きはこれくらいにして、早速本題に入ろう。

商業の科学

我々のこの商業の講座のことを聞いた人々の多くは、こうした科学の教授とは商人に商売の術を教えるものと単純に思い込んでしまった。読み書き算盤や取引の仕方や商品の知識といった事柄は商売を行おうという者には確かに有益かつ必要なことであろうが、他の学校においてなさるべきであって、公的なアカデミア[王立大学]の教師にふさわしい事柄ではない。かかる人々に過ちを気付かせるには、**商業の政治科学と商売の実践**とは同じものではないという点を注意せねばならない。前者は国民の統治に携わる人々に関するものであり、後者は商いをする人々に関するものである。前者は国民の全体を目的とし、後者は私的な利益だけを目標にしている。前者は諸国家の経済科学であり、後者は私的な家政の一部である。最後に、前者は国の人口・富裕・勢力・福祉の追究のためのあらゆる技芸と職業をその下に包括しているが、後者は家の富と繁栄を確保するのに役立つような少しばかりの技芸と職業しか含んでいないのである。

商業の科学の諸部分と諸目的

さて、商業および経済の科学は以下の4つの大問題の解決にあたる。I. 可能な限り大きな人口を有すること。II. 可能な限り大きな便益を有すること。III. 可能な限り大きな富裕。IV. 可能な限り大きな勢力。この科学は真理の秩序[ordine]に従って展開される。そこには、人間の普遍的な理性に基づく真理もあり、歴史や経験から得た真理もあり、また、演繹によって得られた真理もある。これらの真理が相互にうまく結びついて配列され、多くの実践的な帰結を伴うようになることで、経済科学、あるいは、もしそう呼びたいのであれば商業の科学が構成されるのである。あまり思慮深くない人々は、私がここで述べているのは単なるプラトニックな理念[空理空論]にすぎないと思う惧れがある。そこで、議論が脇路に逸れぬように注意しながら、この広汎極まりない主題についてちょうど地理学者達のやるように簡単な地図を描くよう努めることにしよう。

そこで私が先ず言っておきたいことは、政治経済の目的は2つしかないということである。すなわち、1. 人口、2. 便宜・富裕・勢力、である。したがって、商業の政治科学にも2種類ある。それは互いに区別されるものであることは確かだが、しかし、本来一体をなすものだから、結び付けられる必要がある。この2つの科学とは、1. 国家が最大限可能な数の市民を有するための科学と、2. その市民達が可能な限り安楽に暮らせ、最大限可能な富裕と勢力を得るようにさせる科学であり、ここから君主の最大限可能な富裕と勢力が生じるのである。それゆえ、ある

人々は商業の学をこの第2の方にだけ、すなわち国民を可能な限り安楽かつ豊かにするための処方だけに限定しているとはいえ、しかしながら彼ら自身がこれを第1の方と切り離せないことを経験によって知っているのである。なぜなら、貴方達は最大限可能な人口を有さずして最大限可能な便宜・富裕・勢力を持ちえないし、便宜・富裕・勢力を欠いては人口もないからである。そこで、真実次のように言うことができるであろう。文明的な国家において出来る害悪の殆ど全ては、自然の原因によるものを別とすれば、これら2つを分離し、その一方を欠くままに他方だけを追い求めようとするところから生じるのだ、と。このことは、これを少しでも考察した人には明らかなことである。

政治経済の第1の目的：人口の増加

既に述べたように政治経済の目的は2つあり、したがってその科学にも2種類あるわけだが、第1の、そして主要なものは、どのようにして、また、いかなる手段によって国の人口を可能な限り増加させるかを知るための科学である。というのも、国民の人口が多くなれば、その君主も最大限可能な富裕と勢力を有することになり、人間の本来的幸福の源となる財も増大し、民衆の上に屢々降りかかる災いに抗する力も多くなるからである。何よりも先ず、ある家長の力と富は彼の所有する羊の群れの大きさに因っているとすれば、彼が最大限可能な数の羊を有するときに彼の力と富は最大になるように、君主達の間においても、他の全ての事情が等しいとすれば、国土の同一面積当たりでより多くの人間を統治する君主の方がより豊かで強力だからである。例を挙げれば、1700万人の臣下を有するフランス国王は、上の理由によって、同じ程度の広さの国土にもっと少ない数の臣下しか有していない他のどの君主達よりも豊かで強力である。さらにまた、既に述べたように、国民の幸福、すなわち、可能な限り確実かつ安楽に生活し、また、我々の本性に不可避免的に伴う自然的・社会的な害悪を可能な限り避けることが経済のあらゆる分野に共通の目的であるわけだが、こうした幸福は政治体 [corpo politico] を構成する人数がその住まう国土との関係において可能な限り多くならないと獲得できないのであって、このことは私が「評註」の中で示したとおりである。一望の下に統治できぬほどに広大な領土をもった国家は、その分だけ弱体化するということはないまでも、その地域相互の、また中央との分離状態によって住民の人口がその国の真の力や繁栄とはならぬことは私も同意する。だが、私の主張したいことは、その政府の力との関係においても、また近隣諸国との関係においても、大きすぎもせず小さすぎもしない広さの国家であれば、その国力と勢力は何よりも最大限可能な人口を有することから生じ、その衰退は維持可能数より少ない人口しかないことに起因する、ということである。

人口増加のための諸方策

事態が私の明らかにしたとおりであり、これは抽象的な議論によってのみならず、何よりも諸国民の歴史によって真実であると示されるからには、人々を司牧する者達が、単に公共のためだ

けではなく自分達自身の利益のためにも、最初にまた最も真剣に考慮すべきことは、彼らの力のないうる限り、また自然条件が許す限り最大限に、その統治するところの国民を構成する人口を増大させることでなくてはならないということになる。さて、そうするためには2つの道がある。一つは、自然的にせよ社会的にせよ人口を減少させる諸要因を除去することであり、もう一つは、人類を増加させる諸要因を活用し、それらを絶えず強化することである。一国 [paese] の人口を規定する諸要因には次のようなものがある。

I. 多数の家族を養うのに適した肥沃な土地。なぜなら、食物の多い森林のほうが狩の獲物に溢れているように、一般的には、生きるのに必要な食糧や原料を豊富に与える土地ほど人口が多いからである。ここで私が一般的にと言っているのは、他の自然的条件や社会的条件が人口を減少させない限り、という意味であって、この点は以下に挙げる全ての場合についても該当する。

II. 健康によい気候と風土。なぜなら、そこでは健康に悪い気候のもとにおけるよりも、人々は健康で長寿を保ち、より多く出産するからであり、したがってそこでは人類はより多く増殖することになるからである。

III. 農業。なぜなら、農業だけでも他のすべての職業を合わせたよりも多い家族を就業させるからであり、また、人々の生計に必要な食糧や原料を増大させ、したがって婚姻を容易にし、それによって人間の生殖を増進するからである。

IV. 製造業。多くの者達に職を与え、また、それなしでは人類が増大できない生存手段をもたらすからである。

V. 商業。第一に、他に生計の途を見いだせないような多くの者達を就業させるからである。そしてまた、食糧や製造品の流通を促進させ、その分だけそれらの消費を増大させることによって、農業やその他の技芸に新たな刺激を与え、そこから人々の生活を維持するための物資や就業の機会が生じては増大し、このようにして極めて多数の家族を生活させるからである。

VI. 漁業と海運。なぜなら、人々が就業する機会を増大し、生活の資を得させるからである。

VII. 報奨金・特権賦与・表彰等々による婚姻の奨励。なぜなら、明らかに、婚姻のみが、人間が生まれ増殖する源泉であるからである。それゆえ、婚姻数の多いところほど出生数が多いことになる。というのも、獣じみたいかわいしい情欲は、さまざまなかたちで両性の結合の成果を失わせしめるからである。

VIII. 法の厳格な遵守。法は我々を悪人達の暴力や不正から守り、かくして我々の生命・名誉・財産を安全ならしめるものであるから、法がより厳格に遵守されているところほど、よりよく生きられる。法のもとでは身分の高い者も低い者も、知者も愚者も、富める者も貧しい者も平等であり、悪人達も善人達からいかなる利をむさぼることもできないのであって、こうした市民生活における平等が生きる意欲を促進するのである。他の事情が等しいとするならば、よりよく生きられるところでこそ、多くの者が生存を望むのである。

IX. 国政 [governo civile] の賢明さと温和さ。なぜなら、これこそが地上において、また文

明社会において見いだしうる最大限の幸福をもって我々を生きさせる大きな原因なのであって、その存するところ人々の集まりも最大となる。というのも、何人も婚姻を厭うことなく、何人も祖国を捨てることなく、外国人も引き寄せられ喜んでそこに留まるからである。

X. 善き賢明な教育。とりわけ道德に関する事柄の教育は、そこから正しく善良な習慣が生じるものである。なぜなら、そうした教育によって培われ善良な習慣を身につけた人々は、あらゆる情念の放埒、とりわけ情欲や無分別な激しい怒りを制止する力や智恵をもつからである。この最初の〔情欲の〕方は、習慣を堕落させて婚姻への嫌悪を引き起こし、2番目の〔怒りの〕方は非理性的な憎悪や野蛮な殺戮や放火や戦争を引き起こして、人類にとって破壊的な要因となる。このことについては深刻な問題がある。昨今の習慣とはいえば、おそらく文明化された国民にふさわしい程度を超えて自由すぎるのではなからうか。現在のヨーロッパでは、婚姻は稀になり、人口も疎らになりつつある。というのも、婚姻に付随する重荷を負うことなく、その快樂だけを享受できるところでは、束縛されるよりも獣じみたいかがわしい情欲に従おうとしないでいられるような正しい習慣の人々はいなくなるであらうからである。また、人々が無分別で野卑なときには、ちょうど野蛮時代のイタリアで見られたように、残酷にお互いを殺し合わずにはいられぬであらう。実際、我々のもとでも最近2件の野蛮な事件が目当たりになされた。息子が父親を残忍に殺害したのと、父親が非道にも自分の息子を殺害したのである。そして、この父親殺しの息子は、我々の聖なる宗教の初歩的な教えにさえ無知であり、かの粗暴極まりない父親の方は、破廉恥な愛欲に溺れていたことが明らかになったのである。こうした近親殺人の例は、人間が犯す最も重い罪の一つであるが、きちんとしつけられた家族には殆ど全く見られないのであって、粗暴で野卑な家族に生じるのである。それだから、私は常々願っていたし、いまでも願っているのだが、読み書きと教理問答が今よりもう少し普及してほしいのである。そうなれば、文化と穏和な習慣がもっと全般化するであらう。

そうするには法律と刑罰だけで充分だ、絞首台と大斧が人間達にとっては乳母と教師の役割を果たすのだ、という意見もあろう。だが、こうした考えは間違っている。なぜなら、力づくは人々をかえって狡猾にするかもしれないが、断じて有徳にはしないのであって、というのも、徳とは、哲学者達が論議しているように、自然的〔本性的〕なもの、あるいは自然そのものに匹敵するほどに自然と混じり合った——そして言うなれば練り上げられた——習性であるから、決して力づくでは得られず、長期に亙る賢明な正しい教育によってのみもたらされるものであるからである。君主国であれ共和国であれ、教育が腐敗して、ただ法の恐怖だけが滅亡を防いでいるような国家を貴方達は見つけられまい。なぜなら、教育と習慣が全般的に荒廃したときには、習慣に替わるものとして法を主張せんとする者達こそ、最初に法を犯す者達なのであって、かくして共和国は習慣も法も欠けたままに留まるであらうから。

以上のような次第であれば、素晴らしい肥沃な気候に位置する国の人口を可能な限り最大にするという政治的課題の解決は容易である。農業と製造業を促進し、洗練させよ。商業と漁業と海

運を増進せよ。人々に婚姻を推奨せよ。法が遵守されるよう注意せよ。統治をして賢明で穏和さと人間性に満ちたものたらしめよ。賢明で正しい教育を促進せよ。さすれば貴方達は可能最大限の人口を有するであろう。既に示したところに従えば、これらの原因が認められるところには、そうした結果が伴わずにはいないからである。

次に、国々の人口を減少させる諸原因であるが、それらは全て上述したところの反対である。なぜなら、上に明らかにした諸要因が人口を増大させるのであれば、それらと反対の諸要因が人口を減少させるのは当然だからである。けれども、この他にも2つほど、少し以前までは見当たらなかったのだが、いまや大量の人々を死亡させている些か特殊な要因を付け加えねばなるまい。すなわち、フランス病[梅毒]と天然痘である。このうち後者は、ある学者達²⁾の計算によれば、出生した者の12分の1乃至13分の1を奪い去っているというし、前者にしてもおそらくこれよりやや少ない程度であろう。

さて、上述の諸要因のあるものは自然的であり、あるものは社会的である。つまり、最初の2つは絶対的に自然的であり、その他は殆ど全部が社会的である。そこで、ある国の人口を可能な限り増大させたいのであれば、人口減少要因を全て除去しなければならないのは明らかである。それは社会的な諸要因についてはおそらく不可能ではないであろう。たとい時としてそれらが、何かしら並外れた勇氣、事態を元に戻せるだけの力量と意欲を備えた、常人を遙かに超えた精神によらずしては根絶し難いと思えるほどに進展してしまっていることがあるとしても、全ては人間の意志と意欲に懸かっているものだからである。自然的な諸要因に関しては、ちょうどイングランドやその他の国々で天然痘に対して種痘が行われているように、部分的には緩和し、被害を少なくすることができよう。また、フランス病に対しても、もはや医者ではなく司法当局が管轄せねばならぬほどに蔓延してしまっているからには、法的措置で対処できるであろうし、そうしなくてはならない。だが、完全に根絶することが不可能な以上、社会的要因によって増大した人口は自然的要因によって損なわれ続けるであろう。そのため、健康に悪い気候の地方や、砂っぽく乾燥した不毛な地方はいつまでも荒れ果てたままであろう。

それゆえ、率直に次のように予言することができよう。すなわち、気候が悪く土壤も痩せており人間や動物を養うのに適したいかなる内的な力も欠いているような立地の国々は全て、たとい並外れた道徳的〔社会的〕な力や住民の勤勞によって人口が満ち溢れるようになったとしても、いつかは力尽きることであろう。なぜなら、人口を増大させる社会的諸原因は時間が経つにつれ弱まり消え失せていくのに対し、逆に人口を破壊する自然的諸原因の方は保たれ続け、ついには道徳的な力を打負かすであろうからである。そして、反対に、気候が好く肥沃な土壤に位置する国々は、たとい社会的諸原因によって住民を奪われることがあっても、早晚人口を増大させることであろう。社会的諸要因は自然的諸要因に対抗して永久に持ち堪えることはできないのだが、自然的諸要因は永続するからである。

政治経済の第2の目的、国民の富裕と勢力

私書きつつあるのは短い論文にすぎない。だからここでは問題の輪郭を描くにとどめ先へ進まねばならない。完全に論じるにはもっと分量を要するであろう。とは言うものの、私は自分が論じるに相応しい範囲を逸脱しているのではないかと惧れている。政治経済の第2の目的は、既に述べたとおり、国民にあらゆる生活必需品を入手させ、さらに富裕と勢力を獲得することである。これを欠くところでは、大きな人口をもつことはできないであろう。我々が生きていくのに要する物資の源泉は、自ずから明らかなように次の4つしかない。すなわち、1. 農業、2. 製造業、3. 漁業、4. 海運、である。ところで、これら4つの源泉は、2つの側面から考察できよう。すなわち、民衆の生計の維持という側面と、富裕・強大たらしめとするという側面とからである。この第2の側面から考察することは、経済の科学の他の目的に属しており、第1の側面に関わる考察が我々の論じる目的である。これらの目的は、単に区別されるだけでなく、実際に異なっている。生命を保ち続けようとするのと、それ以上に豊かに大きくなろうとすることとは、同じではない。しかしながら、ここでは、これら両側面は、国民を見守る人々がいつもそれらを一体化して捉えているように、結び付けられねばならない。その理由は、以下に述べるところから明らかになるが、両方とも追求せず一方を得ることは殆ど不可能なためである。

農業、我々の諸便宜と我々の富裕の第1の源泉

農業は、我々の生存、我々の諸便宜、我々の諸快樂に必要なものを、他の全ての源泉を合わせたよりも多く、我々にもたらす第1の源泉である。農業は我々に、人間の生命に絶対必要な食糧を与えるし、また、製造業のための原料をもたらすのも農業である。農業は、多くの異なった種類の耕作、そして全ての牧畜を含んでいる。小麦や様々な雑穀の耕作、オリーブや葡萄やその他の果樹の栽培、園芸、ゴムの樹や加工用木材の栽培、牛・馬・羊・鳥の飼育、養蚕、等々。これら全ての分野が、全体としての農業に属しているのであって、我々の生活の維持と諸便宜はこれら全ての分野に依存しているのである。農業に関する政治科学は、総合的な経済[economia universale]の一部であり、よく理解され普及するならば、大きな成果をもたらさずにはいない。なぜなら、何事も偶然によるより技術によるほうが上出来になるのであって、理性と思慮は、単なる幸運だけよりも、常に大きくより堅固な力を有するからである。そこで、農業も、既にその資格を認められている他の全ての科学と同様に一つの科学であり、私的ないし公的なものごとにおいて有益たらしめんと欲する人々の心得たるべきことが分かるように、私はここで、それが如何なるものか、その一部を概説してみよう。すなわち、私はここで幾つかの定理[teorema]と若干の問題を書き添えることにするが、それらは幾何学的にしか示せないものであって、こうしたことを全く考えたことのない人々に思われているようにプラトンの的で空想的なものではないのである。

I. 国民の、したがってまた、その君主の、富裕と勢力は、その住まう国土の広さと肥沃さ、

その人口、その労働の総量 [somma delle fatighe] に応じて定まる。

例えば、スペインの豊かさと大いさを計算しようとするのであれば、単純に国土の広さだけでは充分ではなく、それ以外に肥沃さや人口や住民の勤労を考慮しなくてはならない。スペインの国土は常に一定であっても、その大いさや豊かさはいつでも同じではないであろうからである。というのも、仮にスペインがある時代には別の時代の2倍の人口を有し2倍勤勉であるならば、それに応じてより豊かで大きく強いであろうからである。実際、国土の面積や利用可能なはずの勤労や労働、そして海運や外国貿易などからすれば、スペインの人口は現在の3倍以上になれるであろう。つまり、2400万人の人間を養えるはずなのに、今のところは800万人程でしかないのである。もし、そういう時代が来れば——それは可能なことなのだが——、スペインはその分だけ今よりも大きく強くなるであろう。そして、もし、人口と労働が共に増大し、同様に土地が、あるいは土地の肥沃度が増大するならば（これはこれから述べるようにすれば、新たな帝国を獲得せずとも可能なことである）、それに比例して豊かさと大いさも増大するであろう。

II. ここから次のような公理がでてくる。すなわち、土地の量や肥沃度を減じたり、人口や労働の総量を減少させるような全ての事柄は国民を貧困にし弱体にさせるが、これらを増大させるような全ての事柄は同様に国民の富裕と勢力をも増進するのである。

III. そこで、その各々が何らかの有意義な問題の解決を我々に与えてくれるような素晴らしい定理を幾つか示すことができる。その中で第1の定理はこうである。渦や湿地や無用な森林や未墾地は、国民の豊かさや大きさや強さを減少させる。なぜなら、これらはその占める空間の分だけ国土を縮小させ、そこで暮らせたはずの多くの家族から生計を奪って、可能な規模よりも人口を少なくしているからである。そのうえ更に、引き出せたはずの収入を国家から奪い、かくして国民の大きさや強さや豊かさを減少させるのである。

IV. この真理は、我々に、**現有の領土を拡張することなく国民の大きさや強さや豊かさを増大する**、という問題の解決を与える。渦や湿地を干拓し耕作せよ。無用な森林を伐採せよ。未墾地の耕作を促進せよ。そうすれば貴方達は国土を拡大し、国民を、より大きく、より強く、より豊かにすることであろう。確かにそのためには多額の出費を強いられよう。だが、そうした出費は埋め合わされるだけでなく、すぐに有り余るほどの利子 [usura] によって報われるであろう。出費のために何かの企てを差し控えていては、何事も改善しようと努力せぬことになる。この種の企てにおいては、回収する前に先ず支出しないわけにはいかないのである。そんな様では、我々はただ現在のことだけを考え、殆ど将来には配慮しないことになる。これは経済を知らぬ考えである。

V. 第2の定理は、あまりに乾燥していたりあまりに痩せた土壤は国民の富裕を減じるということである。なぜなら、耕作されなければ、その占める分だけその国の面積から差し引かれることになるし、また、耕作されても労働に見合うだけの産出がないので、その労働から期待できたはずの成果が不足することになり、どちらにしても国民の富裕を減少させるからである。だから、

乾燥した土壤を肥沃にしたり、痩せた土壤を強壮にしたりする技術を発明するような人がいれば、その人は国民に多大の貢献をすることになる。そうなれば、国民は失われていた分を獲得し、その富裕は増大しよう。

肥料を用いて痩せた土地を肥沃にすることは殆ど至るところで考えられていたのだが、イングランド人だけが粘土によって土壤を一挙に肥沃かつ強壮にすることを試み、彼らの著述家達の言うところでは、かの地の肥沃さは大部分がこの発明に帰するというほどに成功したのである。この耕作法はあらゆる国で有益だと思われるので、私としてはここで『商業要論』¹⁰⁾の著者〔フォルボネ〕が報告しているとおりにその処方を用いておきたいところなのだが、あまりに長くなるのでそうもできない。そこで関心のある読者は、この著者の書物の第1部第3章を参照願いたい。

VI. 至るところに穀物がまだ熟さぬうちからそれを荒らす害虫がいる。この害虫も一国の富裕を減少させる。だから、あまり費用も掛からずにそれを駆除する方法を発明する人がいれば、その人は多大の利益を祖国にもたらすことになる。ここでもやはりイングランド人は、草の上に塩を散布して多大の成果を収めているという。これは実験に値する方法であろう。そしてイングランド人達が言っているような効果が挙がるようならば、ヨーロッパの全ての君主達によって奨励されるべきであろう。前述のように、豊かで賢明な農業ほど彼らを富ませ強めるものはないのだから。そして、こうした方法が奨励されれば、それに用いられる塩の価格も低廉になるであろう。

VII. 土地の過度に不均等な分配は国民の富裕を減少させる。1万モッジョ〔1 moggio $\approx$ 0.337 ha.〕の土地がたった1家族に所有されている場合と、5千家族によって所有されている場合とを考えてみよう。後者の1万モッジョの方が前者より遙かに良く耕作されるであろうことは自ずと明らかである。なぜなら、第1に、誰もが他人の土地よりも自分の土地の方を良く耕すからであり、第2に、広大な土地の所有者は土地が大きくなるほど、その土地に対する配慮に乏しくなり、熱心でなくなるからであり、第3に、土地が大きくなると、その相当部分が、狩猟場や馬場や——フランス風に言うところの——花壇〔parterri〕等々といった娯楽的な用途に充てられるのが常だからである。したがってこうした非常に不均等な土地の分配は耕地の面積と労働の総量とを減じ、それによって国家の諸便宜と富裕を小さくする。こうした事情は古代の諸共和国にはよく理解されていたのであり、かかる政治的疾患を癒すのに必要不可欠な法律である農業法によって償われたのである。

VIII. 地租の不平等は国民の富裕を減少させる原因である。例えば、ある者はその土地からの収入の10分の1を支払っているのに、他の者は5分の1、すなわち半分も余計に支払っているとしよう。10分の1を支払う前者はその農産物を後者より10分の1ほど安く売ることができよう。したがって、前者は後者より選好されるであろう。この選好は後者を意気阻喪させ、その結果、彼はできることをも差し控えるようになる。すると労働の総量は可能な限り最大にはならないであろう。これは国民の収入と富裕を減少させていってしまう。このような次第であるから、

経済著述家達はみな、よく整備された国家においてはいかなる免税特権 [immunità delle terre, privilegi, franchigia] もあってはならない、と言っているのである。さらに、こうした負担の不平等がどれほど混乱や不正や障害の原因となり、君主達の権利そのものに対して少なからぬ損失を与えていることも付言せねばならぬであろう。

IX. 過度の奢侈は国民の富裕を減少させる。なぜなら、過度の奢侈は、いかなる富も生産しない技芸や職業を日毎に数限りなく生みだし、育て、増加させる一方、反対に真に現実的な収入を生産する諸技芸から多くの人間を引き抜き、それらの技芸を不足させてしまうからである。だから、過度の奢侈は、現実的な成果をもたらす労働の総量を、ひいては国民の諸収入と富裕を減少させるのである。「評註」第26を参照願いたい¹¹⁾。付言すると、まもなく述べるように、過度の奢侈は、ある国民の奢侈品を依存する他国への支払が増大しているのに、その食料品や製造品の輸出による収入の方は一緒に増大していないようなときには、益々激しく富裕を減少させることになる。

X. 貨幣 [danaro] は、あらゆる交換可能な財 [cose mercatabili] の記号 [segno] や表象 [rappresentante] となったため、同時にまた、あらゆる勤労と労働の精神や魂の如きものである。だから、前述のように国民の富裕がそこに懸かっているところの労働の総量を増大しようとするのであれば、国民がその可能性と力を発揮する余裕と活力を与えるのに充分なだけの貨幣が国内で流通することが必要である。そうした水準に貨幣が接近するか、それともそこから乖離するかに応じて、勤労は活気づいたり衰退したりし、それとともに労働の量も増減し、要するに国民が富裕か貧困かが左右されるからである。私は流通 [circoli] と言った。なぜなら、以下のことを知って欲しいからである。淵に淀んだ水ではなく、大地に遍く行き渉る水こそが土地を潤ませ肥沃にする。そのように、未鑄造の金銀や埋もれて遊んでいる貨幣ではなく、循環している貨幣が勤労に活力と刺激を与えるのである。このようなわけだから、金銀や貨幣を大量に有する国民であっても、それが流通しない時にはその勤労を発揮するための起動力と手段を欠き、非常な富の標象 [segno] に囲まれていながら貧窮することになろう。したがって、貨幣の流通を遅らせるような全ての原因は国民を貧しくする原因であり、こうした流通 [corso] や循環 [giro] を容易にし刺激するような全ての原因は国民を富ませるものだということになる。このため多くの国民は、単に貨幣を表象する紙券だけでなく、同時にまた貨幣の替わりに各自の信用 [債権] を表象する紙券や、それに加えて取引可能なあらゆる事物の価値を表象する紙券を流通させ、そのようにして貨幣と一緒に大量の労働や富を運ぶ記号の量と速度を増加することを考えたのである。

[原註] b. 『商業試論』、ロンドン、1756年、を参照せよ¹²⁾。

XI. 貨幣の極端に高い利子は、農業・製造業・商業を停滞させて公共の富裕の衰退の原因となる。その理由は、貨幣の流通を妨げ、それを遊休させていかなる価値も効力ももたなくしてしまうからである。というのも、貨幣の利子があまりに高いところでは、耕作や製造業や海運業のために用いたくても貨幣をもたぬ者は、不承不承ながら極端な高利で借りねばならず、ほんの僅か

の成果しか自分には返らず、着手した労働を自身の利益よりも寧ろ貸手のために続けねばならないからである。こうして、勤労を阻害し、労働の総量を減少させる原因となる。そして、既に示したように、労働の減少は全てそれに応じて国家を貧しくするのである。重厚博識なあるイングランドの著述家^cが、その全才知を傾けて、ある国家において利子が高かろうが低かろうが関係のないことであるというのみならず、法律によって利子を低めようとするのは有害であることを論証しようとしたことは、私も知っている。だが、私はまた、他の国々の為政者達はそうした法を実施してうまくいかなかったわけではないのに、イングランド人達自身はいかなる注意も払わなかったこと、にもかかわらずこの時以来徐々に彼らは利子を6%から3%にまで引き下げていったことも知っている。しかし、この広大かつ複雑な主題に私は立ち入るつもりはない。さしあたりはデュト^dやヒューム^eやガリアーニ^fといった、余人の及ばぬほどにこの問題の解明に打ち込んだ人々、とりわけデュトの著書を繙いていただきたい。

[原註] c. ロック¹³⁾。

[原註] d. 『財政に関する政治的省察』¹⁴⁾。

[原註] e. 『政治論集』¹⁵⁾。

[原註] f. 『貨幣論』¹⁶⁾。

私が思うに、これらの僅かな命題だけでも、政治経済のこの分野が、他の全ての科学分野と同様、多大の効用も生み出す真の諸原理を有していること、したがって、日頃疎かにされているけれども、いま少し振興されるに値するということを何人にも明らかにするには充分であろう。

国民の便宜・富裕・勢力の第2の源泉：製造業

製造業に関しては「評註」第22で私は多くを語ったので¹⁷⁾、ここでは繰り返したくないのだが、私がこの「論考」の目的として予定していたところ——すなわち、何度も述べたように、経済は我々に大いに関わる一個の科学であることを示し、その主要な教え [lumi] の若干を明らかにすること、そして私に可能な限りこの科学が我々によってもっとよく知られ、評価され、振興されるようにすること——と切り離しえない幾つかの点は敢えて述べることにしよう。私がこれから述べようとしていることの基本として、次の点を指摘しておこう。すなわち、奢侈的な生活をしなくても、各人に必要とされる製造業——この製造業という言葉は、それらなしではやっていけないようなあらゆる技芸の労働と解する——の諸製品に充てられる年々の支出は、少なくとも各自の年々の必需品の6分の1前後であろう、ということである。

I. ここから第1に、必需品の製造業だけで少なくとも国民の全支出の6分の1をなすということが帰結する。例えば、貴方達が文明的諸国民にあつては純然たる必需品に充てられる年間支出は一人当たり20デユカートであると見做すならば、人口300万人の国民の年々の支出は6000万デユカートとなり、そのうちの1000万デユカートが、各々の家族に必要とされる状態に応じて衣料、家具、技芸の道具といった純然たる必需品の製造業に消費されるであろう。これは洗練された国

民の場合には少なすぎるかも知れないが、この種の計算では少なく見積もっておいたほうがよからう。

II. 第2に、いかなる製造業もなく、全てを外国から購入しなくてはならない国民の場合は、その価格分を食料品、あるいはそれに替わる漁業・狩猟・鉱業等々の源泉から差し引かねばならない、ということが帰結する。この最後の鉱業が、我々の場合のように欠如した国民には、手工業品の購入手段としては農産物と家畜しか残らないであろう。だが、それらによって手工業品を購入しようとするならば、食料品や家畜を6分の1程度増産するか、年々の食費を6分の1程切り詰めねばならぬであろう。しかし、もし、その国民が製造業を全く欠いているのではなく、一部分だけなのだとしたら、その不足分に応じて農業を増進するか食費を切り詰めればよからう。そうしなければ、その国民は年毎に甚だしく衰退し窮乏していくであろう。

III. 第3の帰結はこうである。ある国民が、文明的で洗練された国民の存続に不可欠な諸技芸や製造業には少しも欠けていないのだが、原材料が全く、あるいは一部不足しているようなときは、毎年諸外国から技芸の原料を購入する支出分だけ農業と製造業を増大せしめねばならない。なぜなら、こうした補填だけが、収支の均衡を傾けずにおくからであり、もしその農産物や製造業品の余剰分が諸外国からの受取分を補うことができないときには、その国は年毎に衰退し貧窮するからである。

IV. 第4の帰結は、もし外国製の奢侈的な食品や手工業品への需要が増大したならば、その国民が貧窮しないためには、それに比例して農産物や手工業品の余剰分を増大させ、諸外国からの受取分と交換するか、交換手段の標象〔貴金属〕と交換に輸出するよう努めねばならず、さもないとその国民は収支不均衡となり、その不均衡に比例して貧窮する、ということである。ここで明記すべきは、かかる不均衡が直ちに補填されなければ、その国民の衰退は年毎に加速し、これを復興するには数世紀を費やしても足りぬほどになる、ということである。我々はその顕著な実例をスペインに見る。我々がこうした衰退を更に詳細に分析するならば、おそらくは〔落下〕物体の加速運動とさほど異ならぬ法則〔ragione〕を発見できるであろう。

V. 未開でも野蛮でもない諸国民にあっては年々の支出の6分の1が純然たる必需品の製造業に充てられるとするならば、それらの製造業だけで人口の6分の1を扶養していること、したがってある国民がそれを全く欠いているときには、これらの技芸が振興していれば得られたであろう人口より6分の1程少なく、また、それを全面的に欠いていないとしても、技芸が不足しているその分だけ人口が少なくなっている、ということが帰結する。だが、もしある国民が彼らの必要量の2倍の製造業を有し、その余剰分を——たとい純然たる受動的貿易によってであれ——輸出するならば、その国民の人口の増加分は6分の2よりもかなり大きくなるであろう。なぜなら、明白なように、この国民は人口の6分の2を製造業によって扶養しているわけだが、各人は所得が増えるに応じて飲食量を増やすので、繁栄せる製造業は農産物や家畜の消費を増大させ、これによって農業や牧畜が増進しもっと多くの家族に生計をもたらすであろうから、人口は2倍以上

に増加することになるのである。製造業の成長率が他の値である場合にも同様にして計算できよう。

VI. 君主の諸収入と勢力は、その統治する国民の人口と労働の総量に比例する。したがって、既に示したように農業や製造業を促進することは人口や労働の総量を促進することなのであるから、これは君主の諸収入と勢力を増大することになり、反対にそれらを縮小させることは収入と勢力を減少させることになる。だから君主の諸利益を図る任務にある者達は、彼ら自身や他の何らかのために農業や製造業の妨げとなるようないかなる原因も生じさせぬこと、また、逆に耕作や技芸を育成し改良するようなあらゆる原因を奨励し保護することを、他の何事にもまして細心入念に考慮しなくてはならない。そうした諸原因について私は「評註」第22やその他の箇所ですつたので、以下には少し別のことを述べよう。

VII. そこできて、欲しえするならば、**諸技芸を改善し増進する**、という問題は実践によって容易に解決することができる。あまりに墮落し無知で粗野になった民衆が何かの改善を望んだり考えたりすることはありえないから、諸技芸の改善と増進は国民の精神と知識に懸かっている。そして成長はこれらの技芸が耕作者にもたらす効用と利得に懸かっている。貴方達は、優れた偉大な才能を名誉や褒賞によって重んじることで国民の精神を高揚できるし、技芸に関連したいろいろな事物を国民に熱心に教育することで必要な知識を普及できる。さらに貴方達は、手工業品の国内流通や国外輸出を助成することで、公共の利益を促進できる。だから、有為の才能を重んじ彼らを褒賞しなさい。技芸やその改良のための科学の学会[*accademia*]や学校を設立しなさい。もし優れた教師がいらないのなら、海外から招聘し、彼らを尊敬し褒賞しなさい。国民の間に生まれかけている、あるいは現に行われている国内流通を助成しなさい。勤労と労働を作動させ刺激する魂である外国貿易を促進し保護しなさい。これら全てが見事な手際でなされたなら、貴方達はあらゆる技芸を改良し増進したことになるであろう。

VIII. ある国民において、何物も生産しない階級が必要以上に増大すると——すなわち、そうした諸階級が市民体 [*corpo civile*] や文明社会に必要な諸職業との間に保つべき比率以上に増大すると——、労働の総量は減少し、それにとまってその諸便宜や富裕や勢力も減少する。というのも、前述のように、こうした諸便宜や富裕や勢力は土地の広さや肥沃度と労働の総量に比例しており、労働の総量は働く人手 [*braccia lavoranti*] の総量から生じるのであるが、労働せず他人の労働によって生活する者の人数が増えれば、この人手が減少するのはやはり避けられないからである。そこで次のような実践的な帰結が生じる。すなわち、民衆を司牧する者達は、他の何にもまして、怠惰な人間の階級が過度に増大しないようにすることに、最大の注意と熱意、また時には峻厳さをもって努めねばならず、手伝わずに蜜を消費する雄蜂は巣から追い払うという、自然が蜜蜂に与えた法に従わねばならない。この法は、蜜蜂には欠けている固有の理性の法ではなく、まさに神慮の法なのであるが、聖なる法として人間理性によって模倣しうる、また模倣すべきものである。

IX. 農業や諸技芸への無知は国民の富裕を減少させる。というのも労働の総量や労働によって生産される財の価値や値打ちを減少させるからである。労働の量を減少させるというのは、無知が我々の諸作業を遅らせたり滞らせたりして多くの時間に僅かのことしかできなくさせるからである。仕事の値打ちを小さくするというのは、その仕事がもっと良く知っている者達がするような洗練・完成したものには全然ならない、ということから理解できよう。そこで、労働の総量を、またそれによって国民の諸便宜と富裕を増進しようとするのであれば、人間の生活を改善し快適にする事物に携わったり、そうした事物を生産したりしない怠惰な観想家達を通常は生み出しているだけの全ての理論の学校にも遙かにまして、農業やあらゆる機械学の学校が有益かつ必要である。そして、こうした実践的な学校も理論の学校を抜きにしてはきちんと正しく整えられないのだから、それが空しい作業にならないようにするためには、理論の学校を実践の学校に結び付け、全てが何かしら有益な作業を目指すようにせねばならない。

だが、いかなる学校にもまして好ましく、促進されるべきであるのは、農業機械学[meccanica agraria]の学校である。こうした学校は、これまで極めて熱心に助成されてきた他のあらゆる学校にもまして最も必要なものであるにもかかわらず、学者や君主達には最も軽んじられている。農業機械学の洗練が、土地の肥沃さと短時間に少人数で多くの事柄を行う、という2つの多大な利点を必然的に伴うことは、今や確実極まりないことである。これら2点のうち、最初の方は、土地の量を増加させるのと同じことであって、そうした助けがなければ到底得られなかったであろうような大量の実りを僅かな土地で我々にもたらすのである。第2の方は、労働の総量を増大する、すなわち、そうした道具なしでは2倍3倍あるいはそれ以上の時間を要したであろうような事柄を短時間になさしめるのである。さて、農業機械学が発明・洗練を心がけるべき道具とは、以下のような役にたつものの全てであるべきである。1. 土地の耕作を改良し加速すること。こうした種類のものとしては、例えば、イングランド人タル氏の犁や鋤刃があり、デュアメル・デュ・モンソ氏がタルの『イングランドの耕作』の翻訳中で完璧に記述している¹⁸⁾。2. 種籾を節約し、斑なく播種すること。例えば、私が「評註」第8で述べた種蒔き機のようなもの¹⁹⁾。3. 刈り取りや収穫すること。4. 製粉すること。例えば、インティエーリ氏が発明した機械のようなもので、これは、私の聞くところでは、農業機械学を愛好する熱心な探究者であるプーリアの紳士フィリッポ・チェレンターノ氏によって改良されプーリアで用いられ始めているそうである²⁰⁾。5. 食料品の輸送を容易にすること。例えば、これも同じインティエーリ氏によってあらゆる場所で使用できるようにされた空中索道 [palorcio]²¹⁾のようなもので、これについては氏の『穀物の完全な保存法』²²⁾で若干触れられている。6. 多額の費用を要せずに穀物を保存し、それを損なういかなる危険もないような機械。例えば、インティエーリ氏自身の乾燥機 [stufa] や倉庫のようなもので、上記の書物で詳細に記述されている。これは広汎極まりなく、偉大な才能達にとっては豊饒極まりない分野であって、それに見合った熱意をもって彼らが専心するならば、多大の有益な発見をすることを私は些かも疑わない。だが、彼らをそれに専心させるためには、学校や何ら

かの褒賞にもまして有効な誘因は他にない。だから、そうすることは司政者達[economi politici]の任務である。というのも、私人の場合は、古い偏見の力で押し止められたり、結果を不安に思ったり、大多数の者がそうであるように現在のことを配慮して将来に眼を向けようとはしなかったりするので、極めて緩慢にしかこうした事柄に励まないであろうからである。だが、君主達は、しかじかのことがなされるべしと彼らが決断したときには絶大な権限を有しており、褒賞や栄光や命令といった最も強力な動機を用いて、人々を動かすことができるのである。

X. 私的であろうと公的であろうと、人々を怠けさせ、次第に労働を避けるようにさせ、ついには労働を憎悪させるようなあらゆる施設は、貧困をもたらし、国家の荒廃を引き起こす。こうした施設は労働の総量を減少させ、それが続くなれば、ついにはその大部分を破壊するにまで至る。その結果、我々の生活を維持するための諸財の欠乏が必然的に生じて、貧困と過疎——この両者は互いに不可分である——がもたらされる。

XI. 法の執行力の弱体化や裁判の長期化は国家を貧しくする。前者の場合、法は決まって有力者や狡猾な者が掌握する攻撃と欺瞞のための迅速かつ強力な武器であって、弱者や無知な者を防護する武器とは断じてならず、その結果、一国のうちで通常最も弱く最も素朴な部分である労働する人々は、最も強く最も狡猾な部分である働かざる者達によって圧迫されることになるのであって、これにもまして人間にあらゆる労苦を厭わせる事情は他にないからである。後者の場合、第1に、長期の裁判は双方の家族を貧しくするだけでなく、労働以外のことに没頭させることになる。第2に、弁護士や代訴人の実入りが増えるので、大きな儲けと名誉が約束され苦労も少ないと思われるような仕事に群がるのは全ての人間の本性である以上、労働する階層の多数の者がそこに殺到するからである。

国民の富裕と勢力の第3の源泉：商業

我々は今や国民の富裕と勢力の最後の源泉に赴こう。それは、既に述べたように商業のことである。その主要な諸原則を示すに先立ち、私は商業の本質とその様々な種類を簡単に明らかにしておこう。商業とは、**余剰なものを必要なものと交換することである**、と定義される²³⁾。だから、もしも誰も余剰なものを持たなかったり、誰も必要なものがなかったりしたら、商業は一切存在しなかったかもしれない。だが、この点を理解するためには、我々にとって善い——それゆえ財[beni]と呼ばれるものには3種類あることを心に留めねばならない。第1に必需品、第2に便益品、第3に奢侈品、である。そしてこの3種類は、我々の3つの自然な欲求から生じ、3種類の自然な必要となるのである。その3つの欲求とは、生存の欲求、よりよい生存の欲求、そしてあらゆる種類の快楽の欲求、である。それぞれの人間は、自然の力によって、他の何よりも先ず、生存することを愛するのであり、生存が確実となれば、不便や労苦なしに生存することを願望し、これら2つの自然的性向が満たされたと信じれば、残るところは——これもまた同じ自然の力によるものであり、この力は無限の裡に吸収されるまでは静まらぬのであるが——欲しくなってきた

た快樂の全てを得ようと努めることだけである。そこで、それらなしでは我々が生存できないような財を、必需品と言うことにしよう。それらなしでも実際には生存できるが不便を伴うことになるような財は、便益品と言われる。そして最後に、純然たる享樂に奉仕する財を奢侈[品]と名付けよう。

さて、地球上にはこれら3種類の財を全て自分で備えているような者は、個人であれ、家族であれ、国民全体であれ、存在しないのであって、ある者達は必需品を余分にもっているが便益品に不足しており、他の者達は便益品を持っているが若干の必需品を欠いており、また最後に、少なからぬ者達は奢侈品は豊富であるにもかかわらず必需品と便益品が欠乏している、といったことが屢々起こる。神慮の素晴らしい筋立ての一つである、こうした変化に富んだ諸財の配分が、人々を互いに依存させあい、最初は家族と家族の間に、次に村落と村落の間に、同様にして都市と都市の間に、そして最終的には国民と国民の間に、文明社会と殆ど全ての市民的秩序の最初の基礎である、恒久的な利益の相互的な紐帯 [uno scambievolmente ligame di perpetuo interesse] を生じさせるのである。そこで、こうした諸財やそれらを表象する諸記号を別の諸財と交換すること、あるいはまた、諸記号を諸記号や諸財と交換すること、すなわち、貨幣と商品[cose mercatibili]の交換、紙券と貨幣の交換、あるいは実物の交換——取引の様態は変化に富み、取引の異なった仕方に応じて我々が与える名称もやはり様々で夥しいのだが、これら全てが商業なのである。

さて、商業においても、身体と魂と自由といったようなものが考えられる。商業の身体は諸商品である。商業の魂はそれらの循環である。商業の自由はその循環の迅速さに存する。そこで、諸商品を増減するのは、商業の身体を成長させることである。これら諸財の動きと流れが向けられているところの消費を増大させるのは、魂を高揚させるようなことである。身体を整え敏捷にするのは、自由を増大することである。もし貴方達が商品を無くしてしまえば、商業の身体を無くしてしまうであろう。諸財は放任しても消費を無くしてしまえば、商業の魂を消滅させてしまうであろう。たとい消費は放任できても流れを困難で複雑で緩慢にしてしまえば、商業の自由を台無しにしてしまうであろう。

したがって、農産物や手工業品や貨幣や貨物を表象する証券や紙幣の流通が商業を構成することは明らかである。だが、これらのものが流通し交換しあう様態は多様であるので、商業もまた、その種別を構成するところの多様な名称を持っている。というのも、もし、ある国民のなかの異なった部分の間で、例えば家族と家族の間や、村落と村落の間や、地方と地方の間や、諸地方と首都との間に想定するならば**国内商業** [commercio interno]と言われるし、国民と国民の間であれば**外国貿易** [commercio esterno]と言われ、海洋を通じて行われるのであれば、**海上貿易** [commercio marittimo]、自国の品であれば**国産品の貿易** [commercio di proprie robe]、他国の品であれば**仲継貿易** [commercio d'economia]、自国の船舶と船員によるのであれば**能動的貿易** [commercio attivo]、他国によって我々の農産物や手工業品が貿易されるのであれば**受動的貿易** [commercio passivo]であり、必要な農産物や手工業品の流通であれば**必需品の交易** [commer-

cio di necessità], 単なる快樂のための品であれば**奢侈的商業** [commercio di lusso], 我々の農業や製造業や海運業の利益となるのであれば**有益な商業** [commercio utile], 不利益となるのであれば**有害な商業** [commercio dannevole] である。もし、農産物や手工業品が他の農産物や手工業品と取り替えられるのなら**交換**[permuta]であり、貨幣と取り替えられるのなら**売買**[compera e vendita] であり、為替手形による場合もやはり**売買**または**為替取引** [commercio cambiale] である。

さて、商業の本質に議論を戻せば、商業が前述のような流通に存していること、そして流通する素材や流通が想定される場や様々な流通の様態から異なった名称を得ていることは自明であろう。例えば、我が王国が60万の家族から構成されていると仮定しよう。もしこれらの家族の間でいかなる種類の財の交通[comunicazione]も全くなかったなら商業は存在しないし、僅かで緩慢な交通であれば商業は僅かであり、多くの迅速な交通があれば多くの商業がある。そしてこれが国内商業である。他方、もし我々が我が王国の諸財の、ローマ教皇領・トスカーナ・ヴェネツィア共和国・ジェノヴァ共和国・スペイン・フランス・イングランド・オランダその他の国民との交通、あるいはこれらの国々の諸財と我々との交通を想定するなら、そうした交通や流通が外国貿易なのである。

そこで第1に、商業の大きさとは、それを行う国民のそれぞれについて、流通する財の量と循環の速度に比例する、と理解される。したがって、例えば2つの国民、A国とB国が商業を行っており、A国は6の商品量で4の速度、B国は4の商品量で2の速度であるとすれば、A国の商業はB国の商業に対して24対8、すなわち、A国の商業はB国の商業の3倍の大きさということになる。こういう次第であるから、商業を大きくするとは商品の量を増やすか循環を早めることであり、商業を小さくするとは商品の量を減らすか循環を遅らせる、あるいはさらに破滅的であるがこれら両方を一度に行うことである。

さて、ちょうど今取りかかったように、ある国民の富裕と勢力の第3のこの源泉に関する経済諸原理の短い試論をここでまた与えるために、私は先ず、外国貿易の基礎に他ならぬものと見做されるべき国内商業に関する若干の準則を述べ、そののちにイングランド人達がある上に外国貿易の科学を樹立し維持している若干の原則を解明することにしよう。

諸国民の国内商業に関する諸準則

I. 全ての準則のうち最初のものはこうである。すなわち、国内商業は外国貿易の基礎であって、いかなる国民も国内商業を樹立し固めないかぎり外国貿易（有益で優勢な貿易を念頭に置いているのだが）を望むことは全くできない、ということである。この準則の理由は、我々が「評註」第1で示したように²⁴⁾、有益で優勢な外国貿易は国産の農産物や手工業品の輸出に存するからである。貴方達の間で農業や諸技芸が繁栄していなければ貴方達の農産物や手工業品を輸出することは全くできないであろうし、我々が「評註」の至るところで指摘したように、商品や記号、

すなわち貨幣や貨幣の代理物や、その他の商業に関連したあらゆるものの国内流通が、自然的であれ社会的であれ、あらゆる遲疑や消沈の原因から解放されて可能な限り迅速になっていないかぎり、農業や諸技芸の繁栄は不可能である。そして、一国のあらゆる部分へのあらゆるものの迅速で活気づいたこの流通こそが国内商業を形成するのであるから、したがって貴方達が見事な国内商業をもたぬかぎり、いかなる外国貿易ももつことができないであろうことは明確である。というのも、農業や諸技芸が衰退しているところでは余剰を全くもつことができぬからである。

II. 第2の準則は、国内商業を樹立し確固たらしめようとするならば、貴方達は農産物や手工業品の国内流通に最大限の迅速さを与えなければならない、ということである。というのも、こうした流通に商業の本質は存するのであるから、流通のないところに商業はなく、流通が大きく迅速なところにはこの上なく大きな商業があろうからである。例えば、我が王国が60万の家族を含むものとして、彼らの間には農産物や手工業品やその他の何であれ、いかなる交通もないものと仮定しよう。いかなるもののいかなる流通もないのだから、そこにはいかなる商業も全く存在しないこと、のみならず彼らはいかなる社会もいかなる市民体 [corpo civile] も形成しないことは、あまりに明らかである。もし若干の家族が緩慢に交通するならば、その分だけの小さく貧弱な商業があり、多くの家族が大いに、かつ緩慢にではなく交通するようになれば、商業はより大きくより豊かになるであろう。そして、もし全ての家族が互いにあらゆる点に互って恒久的に交通し、この交通が最大限の迅速さでなされるならば、我が王国はこの上なく大きく豊かな国内商業をもち、これらの家族はどの時代に人間達によって形成されたのよりも統一された素晴らしい活気溢れる市民体を形作るであろう。

III. 第3の準則は、国内商業を拡大し加速するには確実さが必要である、ということである。というのは、確実さを欠くところでは何かを循環させようとしてもたいへんな滞りが生じるからであって、人間は誰でも自分の財物を非常に愛するものだから、確実な補償や利得を得るといふほぼ確実な期待がなければ所有物を手放そうとはしないからである。だが、流通が確実でなければ、各人は所有を離れて循環すべき財物があまりに少ないので自分の財物を失う危険が大きいことを看取し、貧困に陥るよりは平凡に暮らす方を好むので、財物を手放すよりも保持しておこうと望むであろう。実際、こうした理由のために、全ての文化的な諸国民においては、公道や農村部ではたらかれる窃盗は国内商業を妨げ市民体を解体・攪乱させるものとして厳しく処罰されているのである。

IV. 流通を、したがってまた国内商業を拡大するのに2番目に必要なものは容易さである。というのは、困難さが流通を制止するのと反対に、容易さは流通の速度を早めるからである。国内商業の大きさはいつでも流通する財物の量と速度に比例する。そこで、諸商品の国内での循環を容易にするためには2種類の手段を用いねばならない。一つは、私が商業の自由に関する「評註」²⁵⁾やその他のところでも述べたような様々な社会的な遲滞の原因を除去することである。もう一つは、便利な道路を建設したり、河川を航行可能にしたり、交通用の運河を開鑿したり、輸送機械

を発明・洗練したり等々することである。というのは、こうしたことがなくては、循環する財物が敏速に動くことは不可能なためである。だから、今日ではヨーロッパの殆ど全土で、あらゆる国民が取り憑かれた輸送の精神のために、聞こえることといえば、新道路の建設、河川交通、交通運河の開鑿、等々ばかりである。これらの諸国民のうちで最も賢明と評されるのはいつでもこうした事柄に最も注意を払った国民である。というのは、(ここでまた繰り返しておきたいのだが)国内商業の繁栄は国民と君主の双方の富裕と勢力の最も大きな源泉であり、それなくしては、国内で勤労が花開いて活気づくことも、国外で貿易を拡大することもできないからである。

V. だが、諸商品の流通を容易にし加速するような全てのもの、そして勤労のあらゆる分野に最大の刺激を与えるもののうちには、ある範囲内に保たれるかぎり貨幣が含まれる。なぜなら、貨幣とは以下のようなものだからである。1. それが表象するその分だけ商品の量を増加させて、実物交換だけでは得られないような容易さと迅速さでもって我々が必要とする物資を我々に供する。2. 必要な全ての働き手を我々に与え、働き手が不足しているところではそれを創出するほどの効力を持つ。3. 我々が農産物や手工業品をそれらを必要としているところへ輸送したいときにあらゆる便宜を我々に与える。4. 大量の貨幣によって我々は、不都合なときに売却や交換を余儀なくされる——そうなると大勢の勤労が破壊され弱体化する——ほどに窮迫することを免れ、勤労や労働を些かも損なうことなく好機になるまで農産物や手工業品を保持することができる。5. 諸技芸のみならず自然の作用もまた増大させたり、それらの循環を容易にしたりするのに非常に適した事物を発明・改良する才能を貨幣の働きによって刺激したり育成したりできる。私は、ある範囲内に保たれるかぎり貨幣は多くの善の原因となる、と慎重に述べた。というのも、貨幣が有用であるためには、その量は一国の人口や諸必要より少なすぎても多すぎてもいけないということは確かであると考えているからなのだが、この点は『商業原論』において存分に論じるつもりである。

VI. 少数の者達の掌中にある貨幣は、それを所有する限られた者達にしか使用しようという気を起こさせないが、彼らは貨幣が人手に渡るのを見たくないので多くの事柄を差し控えるであろう。しかし、多数乃至全ての者達の掌中にある貨幣は、多数の者あるいは全ての者達に、貨幣が表象する諸財の全部にせよ一部にせよ、それらと貨幣とを交換しようという気にさせる。だから、貨幣が最も活発に流通を促進し加速するのは、それが国民の間に可能な限り均等に行き渡っているときである、と結論される。というのは、貨幣が少数の家族の間に溜まっているところでは、それらの家族は非常に豊かであっても一般的な流通には些かも影響しないので、そうなった国民は大量の金銀を持ちながらも貧弱で乏しい農業と僅かで粗野な製造業しかなく、富のまっただなかにありながら貧困極まりないということになりかねぬからである。そうした国民を統治する君主が、少数の富者と貧者になった残りの国民全員との均衡を回復するには、この富んだ家族の間にあらゆる種類の——但し国産品の——奢侈を促進することにもまして適切な手段は採用できぬであろう。これが、地球上のどこにもまして中国で、貨幣が最も平等に普及して勤労が最も一般

化し、したがって流通と国内商業が最大になっている原因の一つである。

VII. 前述のように、均等な普及は、広汎で迅速な流通ならびに豊かな国内商業の原因であり、この豊かな国内商業は農業と製造業の繁栄状態の明白な標識である。そこで、ある国民において貨幣が存在し、いま述べているような均等さでもって普及しているかどうかを知るには、流通や国内商業の活力や農業と製造業の状態を考察することが最良で最も確実な証拠となる。というのは、もしこれらが大いに繁栄しているならば、そこには充分な貨幣が存在し市民社会の成員全てに普及していると、自信をもって結論できるからである。しかし、もし上述のような事柄が僅かで緩慢で貧弱であるならば、そこには貨幣は存在しないか、あるいは存在したとしても良く普及していない、と結論されよう。

VIII. 貨幣は諸商品の記号である。したがって、もしそうした記号の量（これは流通しているものの量と理解してほしい。流通しない記号は商業にとっては存在しないも同然であるから）が増大するならば、その各々の一片はそれが記号となっているところの財物のより少ない量を表象することになるであろうし、もし減少するならば、より大きい量を表象することになるであろう。すなわち、貨幣の量が増大すると貨幣の価値 [pregio] は減少し諸商品の価値は増大する。逆に、貨幣の量が減少すると貨幣は貴重になり、それが表象する財物の価値は減少する。それゆえ、ある国民の間に流通している貨幣の量を知りたいのならば、物価に気をつけるべきであって、それが上昇したならば、流通している諸記号の量が増大したことの確かな証拠であり、下落したことが分かったなら、その国民には貨幣が非常に不足しており、したがって流通も少なく緩慢であると結論でき、この国民の国内商業は小さく、農業や諸技芸は衰退しており、そして外国貿易は全くないか小規模であると理解されよう。こうした事柄が分かれば、国民が完全に衰亡することなく、むしろ徐々に回復するように、何らかの対策を見出すことができる。

私の目的が論証を与えることであるよりも現状を論じることであったのなら、ここでもっと他にも素晴らしい有益な事柄を述べることができたのであるが。

イングランド人達がその上に彼らの商業を樹立し維持している諸原則

我々は本稿の至るところで、諸外国に対する我々の支出分の補填は、外国貿易、すなわち我々の余剰物の輸出によるほかはないことを示してきたのであるが、いよいよこの輸出について語り、その一般的な原理・原則を示す必要がある。とりわけ、同一地点で交易している多数の諸国民間の競争における選好 [preferenza]²⁶⁾ というものについて論じなければならない。この選好というのは、国内商業でもそうであるが、外国貿易の魂であり精神である。この点を論じるにあたって、私はイングランドの最良の著述家達の諸原理に添うことにしよう。というのも、ヨーロッパのあらゆる国民のうちで、彼らにもまして、国家の経済や外国貿易や国内商業を、より多く、また、より良く考察したものはいないからである。それゆえ、イングランド人達がかくも偉大な教師であるこの技術に関して、我々が彼らを模範としたとしても非難されることはないであろう。

さて、イングランド人達は、国家の経済と商業において、以下のような9つの原理をもち、常にこれらに従っている。彼らの商業のあのような隆盛と富裕とは、これらによって獲得されたのである²⁷⁾。これらの原理は、彼らの多くの書物のうちに、就中、『プリティシュ・マーチャント』²⁸⁾と、我々が以前にも賞賛したジョシュア・ジー氏のあの見事な著書²⁹⁾のうちに見出される。

I. そこで、目下の議論に関して最初に押さえておくべき原理は、他の多くの国々に何かしら依存しているある国民の、輸入相手として依存する国々、そしてまた、他の全ての国々に対するところの明白かつ唯一の真の利得や収入といえ、その収入は余剰の輸出によるものだということである。というのも、ただそうすることによってのみ、支出先の国々からの収入が生じるのであって、他ならぬこの収入による以外には、年々の支出を補填することはできないからである。この原理から次のように帰結される。すなわち、1. 国外に何も輸出しない国家には収入がない。したがって、それでも諸外国から輸入をしているのであれば、その国家は衰退し続ける。2. 国外に僅かしか輸出しない国家は収入が少ない。したがって、支出の方が多ければ、支出が収入を超過する分だけ衰退する。3. 国外に多量に輸出する国家は収入が多い。そして、その収入が支出に等しいならば、現状維持の状態にある。また、収入が支出を超過しているならば、その分だけ成長しつつある。4. 輸出を遅らせたり、減少させる諸原因となるものは、同様にして収入を減少させ、さらに国家や君主の富裕や勢力——これら双方は不可分である——を減少させることになる。5. 輸出を促進し、増大させる諸原因となるものは、同様に収入を増大させ、そして、国家と君主を富ませることになる。

II. 第2の一般的な原理は、収入をますます多く、より純益たらしめるように、国民の余剰を輸出する多くの方法のうちで最も有益かつ有利なものを選ばなければならない、ということである。この方法というのは、諸技芸の原料を未加工のまま輸出してはならないということである。もし全てを加工できないならば、可能な限り加工し、可能な限り加工品を輸出することである。この原理の帰結として、第1に、他の全ての事情が等しいならば、加工品を多く輸出する国家ほど、それを少ししか輸出しない国、あるいは原料品しか輸出しない国より大きな収入を得ることになる。第2に、国内で加工できたはずの原料品を輸出することは、国家を没落させることになる。というのも、国家を諸技芸に関する無知のうちに留まらせ、また、外国に依存したままにさせるからである。

この原則がもっと良く理解できるように、我が王国について当てはめてみることにしよう。我々は、非常な利益をもたらす技芸の原料である羊毛と生糸を有している。その品質はといえば、少なくとも決して悪質なものではないし、ごく僅かな国々を別とすれば、他と比べても劣るものではない。我々は、この羊毛をヴェネツィア人達に、生糸をアルプス以北に大量に売っている。これは確かに収入であり、所得であるにはちがいない。だが、同時にまた、我々がこれらの原料品を服地・帽子・靴下等々の手工業品に加工して輸出する場合と比べたら、国家的にはむしろ損失である。なぜなら、1. 我々が我々自身もまた必要とする諸技芸の原料を輸出し続ける限り、我々

はそれらを全く育成できないであろうし、その結果、我々は何時までも外国人達に依存したままであり、彼らは我々を一種の貢納者のような状態に陥れるであろうからであり、2. 我々が購入する手工業品のために、我々は彼らに、おそらく我々の原料品の全てによって受け取るよりも大きな額の貨幣を支払うであろうからであり、3. これらの原料品を加工することの収益が我々から失われ外国人達の獲得するところとなり、我々の貧者達を有効に就業させる大きな機会が我々から奪われるからである。例を挙げれば、1 カンターロ [1 cantaro $\equiv$ 89.1 kilograms] 当たり50 ドゥカート³⁰⁾の羊毛100カンターロは我々に5000ドゥカートをもたらし、1 リップラ [1 libbra $\equiv$ 343 grams] 当たり2 ドゥカートの生糸10万リップラは20万ドゥカートをもたらし、100 カンターロの加工された羊毛〔毛織物〕は、熱心で勤勉な国民には少なくとも5万ドゥカート、すなわち原料の10倍の値をもたらし、巧みに加工された絹は60万ドゥカート、すなわち原料の3倍の値をもたらし、こうした額から我々が原料品を加工したり染色したりするために購入せねばならない若干の財の価値を差し引いても、無数の家族を養うに足る巨大な収益が我々に残されるであろう。イングランド人達はこうした原則の実践によって莫大な富を獲得したのであり、このことは彼ら自身が告白している。また、『スペインの財政に関する諸考察』³⁰⁾の著者は、こうした方策が等閑にされたためにスペインはずっと貧しいままだったのだということを示している。というのも、この原則の実践は、諸技芸を促進・改良し、人々を就業させて国家に役立つようにし、人口を増加させ、標象的な富、すなわち貨幣を増加させ、君主の収入を増大させ、最後に国家をそれ自身としても、また他の国々と比較しても、繁栄した強力なものにするからである。

III. 第3の一般的原理は、ある国家における余剰物を増大させることは直ちにその収入を増加させる、ということである。なぜなら、第1の原理において示されたように、国家の収入の増大は余剰物の輸出によるばかりではないからである。そうして、余剰物を増大させようと欲するならば、人間の諸欲求に対して必要とされるあらゆる物は、いかなる種類の物であれ、各人に充分だけでなく可能な限り多く獲得されねばならない、という重要な格率によって国民全体が駆り立てられる必要がある。だが、ある国民がこの格率のいわば虜となるには、あらゆる種類の財や実技や職業が、単なるその使用の観点からではなく、商業の観点から捉えられなければならない、純然たる国内需要だけでなく商業に一切が関連せしめられねばならない。というのも、職業や実技がただ生活手段や純然たる必要の観点からのみ捉えられ、まだ商業の観点からは全く捉えられていないときには、各人はそれぞれにとって足りるだけを得ようと努めるばかりでそれ以上は求めないからであって、そうした場合には決して余剰は生じないであろう。しかし、あらゆる事柄に交換者としての視線を注ぎ、最大限可能な利益を得るのに打ち込むならば、各人は交換するための余剰を得ようと努力することであろう。そして、個々人の余剰は国民の余剰を形成し、かかる余剰は外国貿易のための大量の素材となるであろう³¹⁾。

この格率は、イングランドを富ますのに他の何にもまして寄与した格率の一つである。1689年に至るまでイングランド人達は農業を単に生計維持の支柱としか考えず、商取引 [negozio] のた

めのものとは見做していなかった。また、この時期までイングランドは屢々食糧不足となり、それどころか深刻な飢餓にも苦しんだものであった。だが、同年に議会在イングランドの船舶でイングランド産の食糧を輸出する者への奨励金を承認すると、農業は全国民から商取引として考えられるようになり、農業は発展して食糧不足に苛まれることもなくなり、極めて大量の農産物を毎年海外に売却できたのであった。彼らは製造業に関しても、競争における選好を得るために同一の方法を用いた。その結果、製造業は周知のとおり偉大と洗練の域に達したのである。したがって、真の富裕と偉大を求める全ての国民にあっては、農業と製造業によって外国貿易の最も豊富な素材となる余剰を得られるようにするには、それらが商取引として考えられねばならないであろう³²⁾。

だが、こうした精神がある国民においてその全ての成員のうちに行き渡るためには、欲する時に欲するだけの量の余剰を輸出できることが確実でなければならない。この確実さに欠けると、余剰を手に入れようと努める者はいなくなり、農業と就業はもはや商人の眼で見られることはなくなり、ただ単なる生活手段を目的とするものになってしまうであろう。この確実さは次の2点に基づく。第1に、輸出の時期に関してもその量に関しても干渉されぬこと。第2に、各人が他国民との競争において選好ないしは少なくとも同等の条件を得られるように輸出関税を調整すること。これら2点を欠くとき、輸出の確実さも欠け、この欠如は余剰を得ようという意欲を喪失させることになる。次に、輸出の行われるべき場所に関しては、時期や量に関する場合ほどには自由である必要はない。だが、国内の様々な地域との交通に困難をきたさないような何箇所かの地点から輸出が行われることは当を得たことである。なぜなら、この不確実さは、適時に適量を得ることを妨げ、そうした意欲を消沈させるからである。また、交通の困難さは農産物や手工業品の輸送費を増大させ、競争に耐えられない状態に売手を置くからである。

しかし、ここで、よく口にされる一つの異論に答えておかねばならない。それは、いかなる時・いかなる量に関しても自由な輸出が認められたとしたら、人間の魂のうちでこのうえなく強力な刺激となる利得欲のために、流出する財の全面的な不足が生じ、その結果、やがてはそれらの財を、とりわけ一次的・二次的な必需品の場合は、我々が売却した時よりも高い価格で外国から買い戻さねばならぬ必要に迫られるのではないか、という異論である。しかし、これは私にはいたずらな懸念だと思われる。第1に、製造業においてはこうした懸念はない。製造業の場合、輸出が増大すればするほど、量もまた増大する。なぜなら、我々が幾つかの「評註」で示したように、輸出の増大につれ、あらゆる勤労の第一の主要な動機である利益が増大するからである。次に、諸技芸の原料に関しては、国内で加工しきれない分でないかぎり原料を輸出するべきではないということを明白に教えている第2の一般的原理を理由として私によって除外されている。最後に、食糧に関しては、食糧を輸出しようとする者達が、国内には、自分用にせよ商売用にせよ食糧を購入する買手を見つけないような国がもしもあるとすれば、そうした国ではかかる懸念もありうるであろう。しかし、私は、そのような国民は地球上の何処にも存在しないと思う。少なく

とも我々はこれに該当していない。我々は各人が自分の食糧を備えようとしている。そうして、その備蓄が確保されたとき、余剰が生じるのである。また、それを備えることができない者達には、再販売するために購入する者達の存在が十分な保証を与えている。そして、あの利得の原理によって動かされているこれらの者達は、この原理ゆえに過剰な輸出が心配されているわけではあるが、同じ価格で同胞に売れるものを国外に輸出するようなことは決してしないであろう。こうして、一切が想定される利得の可能性によって自然に調整されているのであるから、国内での売却の方が輸出するよりも利得の可能性が大きいまたは等しいならば、不足の懸念は全くないし、また、もし輸出の方が利得の可能性が大きいのであるならば、国内に食糧が豊富にあることの証拠であり、したがって不足を懸念する必要はない。これこそが、我が王国にとって、いかなる時・いかなる量であろうとも、穀物の、また、同様にして葡萄酒の輸出許可 [tratte] を開放することがこの上なく有益であり、そうしても決してそれらの不足に悩まされることはないだろうと、私が信じている理由である。

IV. 第4の一般的原理は、我々が原料不足のためにある製造業部門を欠いている場合には、その加工品ではなく、原材料の輸入が常に優先されねばならないということである。なぜなら、何かを我々が購入せねばならない時、経済的理性 [la ragione economica] が我々に教えるところは、常に可能な限りの最小の費用たるべしということであり、この場合であれば、可能な限り最小の費用とは原料品の費用であることは明白だからである。付言するなら、そのような節約や製造業の利益だけではなく、我々はこうした方法によって諸技芸の活気を保ち、それによって——一度ならず述べたように——公共経済において技術が主要な関心を注ぐべき問題である国民の就業の機会もまた増やせるからでもある。例えば、我々は羊毛や亜麻や毛皮の製品を輸入しているが、これらの原料を輸入するだけにしてそれを加工するように努力した方がよい。そうすれば、第1に、我々は新技術を国内に導入して我々の技芸を洗練するであろう。これは多大な公共の利益をもたらさずにはいない。第2に、我々は人々により多くの就業の場を得さしめるであろう。第3に、就業したこの人々は、自国の生産物の消費を拡大し、そのことを通じて、農業や他の第一に必要な諸職業に対して新たな刺激と活力を与えるであろう。

V. 第5の一般的原理は、我々の生産物の消費を妨げ国内の製造業や耕作やその他の技芸の進歩を阻害するような諸商品の輸入は国家の衰亡をもたらす、ということである。なぜなら、第1に、国内の製造業や耕作や他の技芸が少しずつ衰退していくことになるからである。第2に、諸技芸の衰退につれて、人々の生活手段が不足していくからである。第3に、窮乏するにつれて、国民の人口は減少し、その結果、国家は絶対的にも相対的にもその力を失っていくからである。

VI. 第6の一般的原理は、純然たる奢侈品の輸入は国家にとって常に真の現実的な損失である、ということである。この原則を理解するには、我々の必要や便益のために求められるのではなく、すなわち、生存や安楽に役立つのではなく、まさしく、我々の不必要な貪欲を満たすのに充てられるあらゆる出費が奢侈と呼ばれていることに注意する必要がある。さらに注意すべき点は、奢

侈というものは自国の自然や技芸の産物によることもあれば外国の産物によることもある、ということである。国内の産物によって奢侈が促されるのであれば、適性な限度を設けることを知らぬ若干の個々人にはたとい有害であろうとも、国家にとっては常に有益である。その理由は、自然および技芸の生産物の消費を促進するからである。そして、消費を促進することによって耕作者や職人に利得をもたらし、利得をもたらすことによって耕作や諸技芸を刺激し、さらに生活手段を与えるからであり、このようにして人口を増加させ、そこから国家の力が生じるからである。

だが、外国の産物でしか奢侈が保たれないのであれば、それはいつでも確実に国家を滅ぼす。というのも、第1に、同時に収入を増大させることなく支出だけを増大させ、このために年ごとにますます貧しくなるからである。第2に、国内の耕作や諸技芸を消沈させ、多数の者から生活手段を奪い、その結果、人口が減少するからである。もし、こうした奢侈品を我々のもとへ運んでくるのが外国人達自身の手によるのであれば、これはさらに一層大きな害悪である。なぜなら、我々は他国民の輩下にされ奴隷のようにされてしまうからである。彼らのもとでは、我々の生産物は彼らが勝手に与える価値にしかならないであろうし、彼らの財は常に多大な価値をもつであろう。これは、国家の窮乏の新たな原因である。そこで、純然たる奢侈品の輸入が有益でありうるのはある特別な場合だけに限られる。それは、輸入した奢侈品を輸出して利潤をあげる場合であり、オランダ人を初めとして所謂仲継貿易に従事している諸国民が行っていることである。だが、これを可能にするには国家は強力な海運業を有する必要がある。奢侈についての「評註」を参照されたい。

VII. 第7の原理は、外国の商品の輸入は、それらをまた輸出するためであり、自国の船舶によって行われるのであれば、常に国家にとっては大きく確実な所得であるということである。その所得は以下の点に存する。第1に、価値の差異による利潤である。例えば、輸入時には100万で購入された諸商品を輸出時には150万で売却したとすれば、国家は50万を利得したことになる。オランダ人は、他の北方の諸国民が殆どあるいは全く商業を行っていなかった時期に、一切の交易を彼らのものとして富んだのであった。第2に、海運業への就業である。というのも、こうした商業は多数の人手がなくては行えないのであって、多くの人々が雇用されるということは国家にとって大いに有益である。第3に、船舶の建造に必要な多くの技芸への就業であって、これは国民の一部に新たな生活手段を与える。第4に、船舶の建造に必要な原料の消費であって、これは土地に価値を、耕作に刺激を与える。第5に、優秀な海運力が商業に約束する保護である。

VIII. 第8の原理は、大量の船舶と海員を擁し、その一部を他国民に用だてられることは国家にとって確かな所得であるということである。なぜなら、人々を国家に貢献するように就業させ、国家には傭船によるあらゆる所得がもたらされるからである。イングランド人とオランダ人は、こうした方法でポルトガルの殆どの商取引を、また同様にスペインの大部分の商取引を行い、多大の利潤を得ている。

IX. 第9の、そして最後の一般的原理は、競争における選好は商業の魂であって、これを生み

だすような全ての原因は同時にまた商業に精神と活力を与えて促進するものであり、また、これに反する原因となるものは商業を根本から破壊するものである、ということである。既に述べたように、諸商品の競争における選好とは、多数の者が同じ場所に同じ財を持ってきて売ろうとする場合に、ある者が他の者達よりも販売において好まれるということである。こうした選好は、財の良質さから生じたり、価格の低廉さから生じたり、あるいはこの2つが一緒になるところから生じる。もし財の質が同じように良ければ、安い価格で売ることができる方が選好されるであろう。もし価格が等しいのであれば、良質な財を持つ方が選好されるであろう。そして、もし全てが同じようであれば、より熱心な方が選好されるであろう。したがって、第1に、物理的であれ政治的であれ、商品の改良のための全ての措置は、選好へと至らしめる。第2に、物理的であれ政治的であれ、輸送費や関税を引き下げる全ての措置は、選好へと至らしめる。第3に、時間を節約させるあらゆる措置は、選好へと至らしめる。反対に、商品の質の低下や費用や関税の増大や時間的な遅延は全て選好を損なわしめる。

そこで、2つの国家がある第三国に対して交易を行っているものと仮定してみよう。この両国のうちで、より良質の農産物や手工業品を有し、関税の支払が少なく、機械や航海術の洗練や河川や道路交通の利便のために輸送費が少なく、また、最終的には商品を輸送する際の障害の少ない方の国が疑いなく選好を得るであろうことは明白である。そして、そうでない方の国は遅れをとって、その商業に莫大な損害と失墜を招くことになる。

さて、もはや私の予定していた限度を超えてあまりにも大きくなってしまったこの「論考」を終えるときであろう。しかしながら、その前に、経済は他の諸科学と同様に、その諸原理の結合によって確実極まる諸成果をもたらす一つの科学であり、それは我々の祖先達には軽視され殆ど開拓されなかったけれども今日では全き光明のうちにあることを、私の思い違いでなければ私は充分に示したはずである、いや明白にしてみせたと断言したいのだが、いまや2つの質問に答え、障害を取り除いておきたい。その第1の質問とは、今日全ヨーロッパに出現しつつある多数の経済に関する著作家達が何らかの有益さを諸国民にもたらしめている、と言う私が、本当に自分の言っているとおりに信じているのか、ということである。答えて言おう、私はそう信じている、と。それどころか、彼らは多大な有益さをもたらすことができるというだけでなく、現に多くのことを成し遂げたと信じている。というのも、こうした真理が実践的な経済の諸源泉のように本当に実り豊かな地位に直ちに到達することは容易ではないけれども、にもかかわらず、これらの真理は日毎に進歩し続けていて、それには大いに期待できるからである。このことはイングランドやフランス、そしてまたスペインを見れば明白である。というのは、他の考慮は抜きにすれば、ヘロニモ・ウスターリス氏が今世紀の20年代に『商業と海運の理論と実践』という名著を執筆して、それ以前には見られなかった光明をかの地に広め、かつては繁栄したスペインの商業が殆ど消失してしまった真の諸原因を示し、その再興のためになしうる、また、なすべきである諸方策を示して以来、スペインの国内商業と外国貿易が大いに改善され増大したことは疑問の余地がないか

らである。他にも、こうした事例や書物によって、今日ではヨーロッパ諸国民の殆ど全員が商業の促進を目指しているということは確実極まりない。であるから、こうした質問をする人々はヨーロッパの現状を殆どあるいは全く理解していないのだ、と私は判断する。既に述べたことではあるが、ここで改めて繰り返し言うておこう。政治的疫病の多くはその原因がいつも人々の悪徳や悪行だけとは限らない。非常にしばしば無知こそがその原因なのである。

私は次のように言う人々がいることを承知している(これが第2の質問ということになる)。すなわち、今はもはやどんな国民でも世界で成功して他から際だった偉大な商業を営むことができるような時代ではない、というのである。なぜなら、彼らが言うには、世界の商業は既に少数の国々に占拠されているので、他の国々はその後塵を拝し、低みに留まり続けるほかないからだというのである。さらに付け加えて言うには、たとえ他の諸国民にはそれができるとしても、我々は世界のこんな片隅に閉じ込められており、ここではいかなる思考も空しいものとなり、我々自身に害をなす結果にしかならないのだ、と。私にはこのように問う人々が真剣に論じているとは思えないのである。というのも、小さな企てにせよ大きな企てにせよ、良い諸規律[ordine]から幸運というものは生じるのであって、我々には神も特別な配慮や恵みを賜らなかったというのであればともかく、諸事物が賢明に秩序づけられて[ordinate]いなくては幸運は得られないということ、彼らは知っているはずであり、知るべきだからである。だが、ある企てをきちんと組織しよう[ordinare]というのであれば、技術なくしてその対象に取り組みぬことを知っておかねばならない。我々がその手綱を握ることを知らず、また、握ろうとしなくても、僥倖の方で我々を導いてくれるなどと期待するのは愚かなことである。今日ではもはや単独で商業帝国を築きうる国民など存在しないし、また、存在できないということを私は否定しない。それは、そうした国民が他の国々からは誰でもしっかりと迎えられるような進路を先に進んでいるものと見做されるからだという理由では決してなく、今日ではもはや農業や製造業や海運は少数の者だけに分かるような秘密ではなく、ヨーロッパの全ての国民が知っている技術であって、それぞれの国は自らに適した見返りのよい分野を選び取っているからである。にもかかわらず、たとえ平凡な国であっても、他の国々よりもっと賢明で熱心であるべく努力するならば、他から大いに抜きん出ることができるだけの時間はまだ残されている。ましてやそれがこうした栄光を求めている他の国々よりも国内の自然諸力に恵まれている国であれば尚更である。私が幾つかの「評註」の中で述べたことをここで繰り返しておきたい。何人も他人にできたことが自分にはできぬのではないかなどと臆然自失してはならない。人間は何時でも同じ力と同じ定め[ordine]をもって生まれ、生き、死んでいったのである。

次に、我々は世界の片隅に閉じ込められている、という点についてであるが、もしもそのようなことを言う者がいたとせば、それで何を言わんとしているのかということがやっと私にも良く分かったのであるが、そういう人は眼を鎖ざして何を言っているのかも分からずに無駄口を叩いているようなものである。というのも、私が思うに、我々が地球と読んでいるこの球体の上では

誰も片隅になど閉じ込められてはいないからである。それだったら、多くの人々が住む温暖な気候の土地から遠く隔たり、まさに世界の果てに見えるあの極地に住む人々にこそ該当するのではないか。そうだとしたら、フランス人やオランダ人やイングランド人の方が北極に近いのだから、我々よりももっと閉じ込められた境遇にあるということになろう。スウェーデン人やモスクワ人はもっとそうである。にもかかわらず、フランス人・イングランド人・オランダ人はもちろんのこと、スウェーデン人やモスクワ人までもが、製造業や商業において我々を凌駕しているのではないか。また、我々の歴史がアマルフィやサレルノやターラントやバーリといった諸例を示しているように、我々もかつては第一級に算えられる商業を有していたではないか。あの頃も我々は現におるのと同じこの片隅にあったのに。さらにまた、ヴェネツィア人達は我々以上に閉じ込められていたのに偉大な商業を営んでいたではないか。あるいは、私がまた思うに、このように論じている人々は、今やヨーロッパの航海術は周知のとおり洗練の域に達し、航海さえすれば、この地球上には互いに往来できぬほど遠く離れた国々は全く存在しないこと、その間隔はますます狭まりつつあることに、気づいていないのではないか。アメリカやアフリカはもとより、インドや中国、ついには日本までを相手とする商人達の無数の貿易会社が、このことの確かな証拠を示している。彼らの船は四季を問わず大洋を往来している。我々が最も安全な航路だけを選び最も穏やかな季節にだけふらついているのとはなんたる相違であろうか。もし我々もまた赴けそうなところへ赴かぬのだとしたら、その責は、時や所、あるいは他人がそう呼びたがるところの幸運などよりも、そうした事柄を知ることや意欲することの欠如に帰せられる、と述べて私は結びとしたい。幸運とは、人類の歴史が我々に教えるように、また、賢者達が示しているように、思慮と勇気をもって立ち向かう者には必ず訪れるものなのである。すなわち、

《愚蒙にして、忍耐を欠き、軟弱なる輩は、
運命を嘆く勿れ。至らぬ己を嘆くべし。》³³⁾

第1巻の終わり

【訳註】

- 1) ジェノヴェーゼの末弟ピエトロのこと。サレルノ近郊のカステイリオーネ (Castiglione) の富裕な農民の一族に属し靴屋を営んでいたジェノヴェーゼ家には、アントニオ、アドリアーノ (Adriano)、トンマーゾ (Tommaso)、ピエトロ (Pietro) の4人兄弟が生まれ、父サルヴァドレーは息子達がそれぞれ司祭・商人・医師・法律家となることを望んだが、次男と三男は相次いで20歳前後で早逝した。首尾よく弁護士資格を取得したピエトロは長兄アントニオの良き協力者となったのだから、この『グレート・ブリテン商業史』第1巻の上梓後まもなく病没する。したがって、第2巻と第3巻については、編集のみならず翻訳そのものが相当部分ジェノヴェーゼ自身の手になるものであろう。

- 2) Huet, Pierre-Daniel(1630-1721), *Le grand trésor historique et politique du florissant commerce des Hollandois dans tous les Etats et empires du monde...*, Rouen : Rousult, 1712.
- 3) Savary des Bruslons, Jacques (1657-1716), *Le parfait négociant, ou instruction générale pour ce qui regarde le commerce de toutes sortes de marchandises, tant de France que des pays étrangers*, Paris : L. Billaine, 1675.
- 4) Ricard, Jean-Pierre(1674-1728), *Le négoce d'Amsterdam contenant tout ce que doivent savoir les marchands et les banquiers, tant ceux qui sont établis à Amsterdam que ceux des pays étrangers*, Amsterdam : N. Etienne Lucas, 1722.
- 5) ウスターリス (Uztáriz, Gerónimo de. 1689-1732) の『商業と海運の理論と実践』(*Theórica y práctica de comercio y de marina en diferentes discursos y calificados exemplares que con específicas providencias se procuran adaptar a la monarchía española para su prompta restauración*, [Madrid, 1724]) とウリョア (Ulloa, Bernardo de. fl. 18 c.) の『スペインの製造業と商業の再建』(*Restablecimiento de las fábricas y comercio español: errores que se padecen en las causales de su cadencia, quales son los legítimos obstáculos que le destruyen, y los medios eficaces de que florezca...*, Madrid : Antonio Marin, 1740, 2 vols.) は、ともに1753年に仏訳が刊行された。前者 (*Théorie et pratique du commerce et de la marine. Traduction libre sur l'espagnol de don Geronimo de Uztáriz, sur la seconde édition de ce livre à Madrid en 1742*, Paris : veuve Estienne, 1753) の訳者はフォルボネ (Véron Duverger de Forbonnais, François. 1722-1800), 後者 (*Rétablissement des manufactures et du commerce d'Espagne. Ouvrage divisé en deux parties, la première qui considère principalement les manufactures d'Espagne ; la seconde qui traite de son commerce maritime, traduit de l'espagnol de D. Bernardo de Ulloa*, Amsterdam-Paris : Estienne, 1753) の訳者はプリュマール・ドゥ・ダンジュール (Plumard de Dangeul, Louis-Joseph. 1722-1777), この両名は同年生まれの従兄弟同士であり、ともにグルネを師と仰ぎ、その勧めによってこれらの翻訳を行った。
- 6) *Ragionamenti sopra la moneta, l'interesse del danaro, le finanze e il commercio scritti e pubblicati in diverse occasioni dal signor Giovanni Locke, tradotti per la prima volta dall'inglese con varie annotazioni*, Firenze : Andrea Bonducci, 1751, 2 voll. 同書はパニーニ (Pagnini della Ventura, Giovanni Francesco. 1714-1789) とタヴァンティ (Tavanti, Angelo. 1714-1781) が編訳したもので、ロック (Locke, John. 1632-1704) の以下の論文が収録されている。Some considerations of the consequences of the lowering of interest and raising the value of money in a letter to a Member of Parliament, London : A. and J. Churchill, 1692; Further considerations concerning raising the value of money, wherein Mr. Lowndes's arguments for it in his late report concerning an essay for the amendment of the silver coins are particularly examined, London : A. and J. Churchill, 1695 ; Short observations on a printed paper intituled :

- For encouraging the coining silver money in England and after for keeping it here*, London: A. and J. Churchill, 1695.
- 7) *Volgarizzamento di saggi sopra diverse materie di letteratura e de morale del sig. abate Trublet dell'Accademia reale delle scienze e delle lettere de Prussia...*, Firenze: Stamperia Mouckiana, 1753. これは, Trublet, Nicolas-Joseph (1697-1770), *Essais sur divers sujets de littérature et de morale*, Paris, 1738 の翻訳だが, 訳者は (イタリア語の純化を目的とした)「クルスカ学会員」とあるだけで未詳。
- 8) インティエーリ (Intieri, Bartoromeo. 1678-1757) は, トスカーナ出身の実業家で在野の科学者。ナポリ大学長のガリアーニ宮廷司祭長 (Galiani, Celestino. 1681-1753)らとともに18世紀前半の南イタリアの文化刷新運動の中心人物となった。ジェノヴェージが初代の教授となった「経済学講座」もインティエーリの発案と寄付によるものである。詳しくは拙稿「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成」(上), 62-65頁を参照。
- 9) この箇所の典拠はウォレス (Wallace, Robert. 1697-1771)であるらしい。実際, 「評註」第22では, *Essai sur la différence du nombre des hommes dans les temps anciens et modernes, dans lequel on établit qu'il étoit plus considérable dans l'antiquité, traduit de l'anglois de M. R. Wallace...par M. de Joncourt...*, Londres, 1754 が参照文献として挙げられている。
- 10) Véron de Forbonnais, François. *Elémens du commerce*, Leyde-Paris: Briasson, David, Le Breton, Durand, 1754.
- 11) この「評註」第26で述べられているジェノヴェージの奢侈論に関しては, 拙稿「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成」(下), 95-98頁を参照。
- 12) 些か意外なことだが, カンティロン (Cantillon, Richard. d.1734) の『商業試論』(*Essai sur la nature du commerce en général traduit de l'anglois*, London: Fletcher Gyles, 1756) が明示的に言及されているのは『グレート・ブリテン商業史』ではこの箇所のみである。
- 13) ジェノヴェージは『グレート・ブリテン商業史』第2巻の「評註」第5では, 《ロック氏が賢明にもイングランド人に助言した貨幣の利子を自然に低下させる唯一の手段》は貿易差額の獲得である, と述べている。そして, 金銀の量が増大すれば, 《記号としての貨幣の価格に他ならぬ利子》もまた低下するからだと説明する。
- 14) Dutot (?-?), *Réflexions politiques sur les finances et le commerce, où l'on examine quelles ont été sur les revenus, les denrées, le change étranger, et conséquemment sur notre commerce, les influences des augmentations des valeurs numéraires des monnoyes*, La Haye, 1738, 2 voll. 同書はデュトが論敵としたムロン (Melon, Jean François. 1675-1738) の『商業論』(*Essai politique sur le commerce*, 1734) の1736年増補版と併せてコスタンティーニ (Costantini, Girolamo. 1690-1774) によりイタリア語に編訳された (*Delle monete, controversia agitata tra due celebri scrittori ultramontani, i signori Melon e Dutot. Si è aggiunto in fine un opuscolo sulla stessa materia del*

- signor abate di Saint-Pierre. Versione dall'idioma francese, Venezia: Antonio Zatta, 1754).*
- 15) ヒューム (Hume, David. 1711-1776)『政治経済論集』(*Political discourses*, Edinburgh: R. Fleming, 1752)の仏訳は1754年に2種類刊行されたが、ジェノヴェージが参照しているのは、ル・ブラン師(Le Blanc, Jean-Bernard)ではなく、Eléazar Mauvillon(1712-1779)による仏訳(*Discours politiques de Mr. David Hume traduits de L'anglois par Mr. de M * * **, Amsterdam: J. Schreuder et Pierre Mortier, 1754)の方である。
- 16) Galiani, Ferdinando (1728-1787), *Della moneta libri cinque*, Napoli: Raimondi, 1750 [i.e. 1751] .
- 17) 「評註」第22は、製造業の保護育成策を中心とした32頁に及ぶ「評註」のなかでも最長のものであるが、ここでジェノヴェージが依拠しているのは殆どがウスターリスとウリョアであることが注目される。また、その末尾では一種の「局地的市場圏」論とも見做しうる興味深い記述がナポリ王国の一地方の実話として語られている。拙稿「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成」(下)、98-101頁を参照。
- 18) Duhamel du Monceau, Henri-Louis (1700-1782), *Traité de la culture des terres*, Paris: Guérin, 1750.
- 19) ここで指示されている「評註」第8は、農業の重要性から説きおこし、その促進の手段として「利益 (utilità), 知識 (scienza), 名誉 (onore), 自由 (libertà)」を掲げて敷衍した15頁に及ぶ長文であるが、問題の「種蒔き機」に関する記述は見当たらない。但し、1689年のイングランドの穀物輸出奨励金 (bounty) が農業に及ぼした効果を試算した箇所に付した「評註」第16では、《スイス人たちの新式種蒔き機 (il nuovo seminatoio degli Svizzeri)》にも言及され、これによって労働力と種蒔がともに4分の3程度節約され、現在の3乃至5倍の播収比が見込まれると述べられている。
- 20) インティエーリには『風力粉挽き場の改良設計』(*Nuova invenzione di fabbricar mulini a vento di B. I. fiorentino...*, Napoli: Mosca, 1716) なる著作もあるが、『ジェノヴェージ経済学著作集』の編者ペルナによると、その他にも彼は、馬に替わって牛を動力とする脱穀機を設計したらしい。尚、チェレンターノ (Celentano, Filippo) は『商業講義』の序文でも、ジェノヴェージの3人の親友の一人として名前を挙げられている。
- 21) 山間部で木材の搬出などに用いられている空中ケーブルのようなもので、1754年7月20日付でジェノヴェージが友人 (Giuseppe De Sanctis) に宛てた書簡 (*Lettere familiari dell'abate Antonio Genovesi*, Napoli: Francesco Petraraja, 1788, vol.1, pp.102-104) によると、インティエーリはこれによってナポリ王国の北辺と半島最南端を縦走し、またアペニン山脈を横断してアドリア海側およびイオニア海側とティレニア海側を結ぶ輸送網を敷設する壮大な計画を抱いていたらしい。
- 22) *Della perfetta conservazione del grano. Discorso di Bartolomeo Intieri*, Napoli: Raimondi, 1854. 熱処理を施して種子の発芽を防止する一種の炉の設計法を記したものである。
- 23) この定義はムロン『商業論』第1章による。

- 24) 《商業もまた他のあらゆる科学と同様にその諸規則を有する……》というビュトル・デュモンの「序論」(Introduction)の第2フレーズに付せられたこの「評註」第1は、「商業汎論」全編の要約、というよりもむしろ素描のようにも見える。ここでジェノヴェージは、《ある国民の行っている商業が有益であるかどうかを知るための諸規則(regole)》として、(1)農業生産、(2)手工業の原材料生産、(3)技芸の洗練、(4)海運の発展、(5)人口増加、(6)貨幣量と流通の増大、(7)為替、の7点を掲げ、簡単な説明を試みている。尚、為替(i cambi)については《商業の真の指標(il vero barometro del commercio)》と呼んでもいるが、貿易差額(il bilancio)の問題に関しては、『商業原論』で詳論の予定と述べ、さしあたり、ムロン『商業論』第13章、(グルネによる)チャイルド『新交易論』仏訳版(*Traité sur le commerce et sur les avantages qui résultent de la réduction de l'intérêt de l'argent avec un petit traité contre l'usure, par le chevalier Thomas Culpeper, traduit de l'anglois, Amsterdam et Berlin: Jean Néaulme, 1754*)の312頁、ヒューム『政治論集』の第5論説の参照を求めている。
- 25) ジェノヴェージは「評註」第25で、ムロン『商業論』(第20章)を引証して神学上の問題としての「自由(思想)」と商業における「自由」とは全く性格が異なることを断った後、《市民的自由(la libertà civile)》が法秩序の下における生命と財産の安全の謂いであるのと同様に、《商業の自由(la libertà del commercio)》にもまた《秩序(ordine)》が不可欠であることを強調し、これに反するものとして、(1)高関税、(2)国内関税、(3)排他的諸特権、(4)商業上の訴訟の長期化の弊害を指摘している。「評註」第8で農業における「自由」に言及した際にも、ジェノヴェージは、「自由」という言葉が意味するところは《圧迫のないこと(la non oppressione)》に他ならぬと述べている。尚、ジェノヴェージの「商業の自由」論のその後の展開については、拙稿「《商業の自由》の理念と現実——アントニオ・ジェノヴェージと1764年「大飢饉」——」、『イタリア学会誌』第37号(1987年)を参照。
- 26) この「選好」という用語法は、同時期のフランスにおける《préférence》の概念を踏まえている。例えば、フォルボネが『百科全書』第3巻(1753年)に執筆した「商業上の競争」(Concurrence, en fait de Commerce)の項目——後に『商業要論』第2章に収録——に次のような記述が見られる。《商業上の競争。この言葉は、選好を望んでいる複数の人物という観念を表している。つまり、異なった者達が同じ財を売っているようなとき、各自は買手の選好を得るためにより良質のものをより廉価で提供しようと努めるということである。／一見してすぐに、競争が勤労の魂と拍車(l'âme et l'aiguillon de l'industrie)であり、商業の最大の動因(le principe le plus actif du commerce)であることが知られる……》(p. 832)。「競争における選好」を説明した「評註」第5は、この箇所の参照を求めている。
- 27) この「9つの原理」は『百科全書』第3巻(1753年)に掲載されたフォルボネ執筆の項目「商業」(Commerce)——後に『商業要論』第1章に収録——を下敷きにしている。すなわち、《いかにして立法者達が商業の目的と結果を一致せしめているかを検討するに先立ち、私は、商業にお

いて最も秀でた国民であるイングランド人達の諸著作が商業取引の得失を判断する目安として掲げている9つの原理を示しておこう。1. 余剰物の輸出は、一国の獲得しうる最も明白な利益である。2. 土地からの余剰生産物の輸出にあたっての最も有利な方法は、その前にそれを加工する、つまり製造品とする (manufacturer) ことである。3. 外国ですっかり加工された製品を持ち込む代わりに原料を輸入して手工業に用だてるとは、大いに貨幣を節約する。4. 商品を商品と交換することは、以下の諸原理に反さない限り、一般的に有利である。5. 国産品の消費を妨げるような商品、また、手工業や工作の発展を害するような商品の輸入は必ず一国を破滅に導く。6. 外国製の奢侈品の輸入は国家にとって真の損失である。7. 止むをえない必需品の輸入は決して悪ではないが、やはり一国を貧しくさせる。8. 再輸出するための外国商品の輸入は実益を得る。9. 他国への船舶の賃貸は有利な商業である》(pp.695-696)。外国貿易の原則のこのような定式化は既にケアリーにも見られる。《さて、いよいよイングランドと諸外国との貿易 (Trade) についてであるが、それらの貿易がどのように我々の農業や手工業、また海運を促進しているか、どんな商品を我々が交換物として受け取っているか、双方の貿易差額はどうか、といった点を研究する必要がある。……/そこでまず東インド貿易からとりあげるが、私は多くの理由からこの貿易は我が王国にとって有害と考える。/このことを明らかにするためには、我々はある貿易が国民にとって有益か有害かを考察しなくてはならない。そうして、上の命題に適合した結論を導かねばならない。そこで私は全ての不偏不党な人々に議論の余地なく承認されるような一般的概念 (general notions) を示すことにしよう。それは以下のとおりである。1. 我々の生産物や製造品を輸出する貿易はイングランド王国にとって有益である。2. 我々のもとで加工されるような商品、あるいは手工業のために役立つような商品を輸入する貿易は有益である。3. それなくしては我々が外国貿易を行えないような財を我々に供給する貿易は有益である。4. 我々の海運を盛んならしめ、船員数を増加せしめるような貿易は有益である。/したがって、我々の生産物や製造品を殆どあるいは全く輸出しないような貿易、国内の手工業の促進や海外貿易の遂行に必要な財を我々に供給しないような貿易、海運を盛んにしないような貿易は、この王国にとって有益とみなすことはできない。とりわけその輸入品が我々自身の製造品の消費を妨げるのであったり、ましてやそれらの輸入品が我々の金銀すなわち財宝 (Bullion or Treasure) と交換されるのなら尚更である》(An Essay on the State of England..., pp.47-48)。

- 28) チャールズ・キング (King, Charles. fl.1721) がロンドンで1713年4月7日から同年7月30日にかけて103号に亘って刊行し1721年に3巻本にまとめられた *The British Merchant, or Commerce preserved, in Answer to the Mercator* は、1753年にフォルボネによって仏訳された (*Le négociant anglois ou traduction libre du livre intitulé «The British merchant», contenant divers mémoires sur le commerce d'Angleterre avec la France, le Portugal et l'Espagne publié pour la première fois en 1713. Dresde-Paris: frères Estienne, 1753, 2 voll.*)。これにはフォルボネによる序説と評註が付けられ、またダヴナント (Davenant, Charles. 1656-1754) の *Discourses on the publick reve-*

nues, and on the trade of England, London, 1698, 2 vols.の「第1 論説」の仏訳 (De l'usage de l'arithmétique politique dans le commerce et les finances par M. Davenant en 1698) も収録されている。

- 29) Gee, Joshua (fl. 1725-1750), *The trade and navigation of Great-Britain considered*, London: S. Burkley, 1729. 同書の最初の仏訳は1749年にロンドンで刊行されているが、ジェノヴェージが参照したのは、その翌年に出た Jean-Baptiste Secondat de Montesquieu (1716-1796) の仏訳 (*Considérations sur le commerce et la navigation de la Grande-Bretagne, ouvrage traduit de l'anglois de M. Joshua Gee sur la quatrième édition*, Genève: Antoine Philibert, 1750) の方である。原書第4 版の刊行は1738年。尚、この訳者は『法の精神』の著者モンテスキューの長男で、自然科学とりわけ農学に造詣が深く、グルネとも何らかの関係があったものと目されている。ジーのこの著作は仏語版ケアリー『イングランド商業論』でもビュートル・デュモンによる加筆部分で屢々言及されており (vol.I. pp.194, 198, 211, 225, 244, 246, 260, vol. II. p.225), ジェノヴェージも「評註」第3 で《[経済を] 悪化させる諸力を改善させる諸力へと転換し、国民を救済するための諸原則》を示した著作としてウスターリスやウリョアと並んで《1750年に英語から翻訳されジュネーブで印刷されたジョシュア・ジーの傑出した小冊子》, さらに, *Remarques sur les avantages et les désavantages de la France et de la Grande-Bretagne par rapport au commerce et aux autres sources de la puissance des états, traduction de l'anglois du chevalier John Nickolls, troisième édition, augmentée d'un Essai sur la police et le commerce des grains*, Dresde, 1754 を挙げている。ジョン・ニコルスはプリュマル・ドゥ・ダンジュルの偽名。これもグルネから勧められたタッカー (Tucker, Josiah. 1713-1799) 『フランスとグレート・ブリテンの交易にかんする利点と不利点についての考察』 (*A brief essay on the advantages and disadvantages which respectively attend France and Great-Britain, with regard to trade...*, London, 1749) に触発されて執筆したものである。津田内匠「プリュマル・ドゥ・ダンジュル『商業とその他の国力の源泉にかんするフランスとグレート・ブリテンの利点と不利点の考察』(1754年)」(1), 『東京経大会誌』, 第137号(1984年)を参照。尚、ジェノヴェージは最初このニコルスの正体はデュアメル・ドゥ・モンソではないかと推測していた(「評註」第10) が、やがて1758年の6月、ナポリ訪問中のプリュマル・ドゥ・ダンジュル本人と面談する機会があって、この誤認は正された(第3巻「評註」第21) ようである。この会談の模様については拙稿「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成」(上), 66頁を参照。

- 30) Véron de Forbonnais, François, *Considérations sur les finances d'Espagne*, Dresde, 1753.

- 31) ジェノヴェージは「評註」第3 でもこの点を力説している。この論点もまたフォルボネに由来する。後者が『百科全書』第4巻(1754年)に執筆した項目「土地の耕作」(Culture des terres) — 一後に『商業要論』第4章「農業について」に収録——に以下のような記述がある。《土地の耕作を単に自給的生存 (subsistance) の面からしか見ていない国民は常に欠乏に怯えながら生活し、ま

た屢々欠乏を味わうことになる。(『スペインの財政に関する諸考察』と題された書物を参照せよ)。これを商業の対象として見る国民はいつでも他国民からの需要に対して十分に供給できるほどの豊富さを享受している》(p. 552)。

32) こうした知見をジェノヴェージはエルベール (Herbert, Claude-Jacques. 1700-1758) 『穀物政策論』(*Essai sur la police générale des grains*, Londres, 1753) から得たらしい。例えば同書には次のような記述が見られる。《……極めて特異に思われることは、彼ら [イングランド人] が自国の商人達に奨励金を与えたことである。すなわち、彼らは自国の小麦を海外市場で販売させるために1単位当たり5シリングを商人達に支払ったのである。この方法が採用された1689年以来、イングランドが欠乏や飢饉に苦しめられるのは全く見られなくなった》(p. 142)。ジェノヴェージは「評註」第10で、1755年に出版された同書の増補第2版を《優れた書物》と讃えるのを初めとして『グレート・ブリテン商業史』の随所で言及している。また、後年、アンシャン・レジーム下のナポリ王国の歪んだ流通機構の弊害が露呈された1763-4年の「大飢饉」を契機に同書を監訳し、「商業の自由」の主張を前面に掲げた「序説」を付している (*Riflessioni sull'economia generale de' grani tradotte dal francese, con un discorso preliminare del signor Abbate Genovesi*, Napoli: 1765)。前掲『《商業の自由》の理念と現実』を参照。尚、エルベールのこの書は匿名で出版されたため、ジェノヴェージはこれもやはりデュアメル・ドゥ・モンソの著書ではないかと考えていたらしい(「評註」第10)。ジェノヴェージの没後にその『私信集』(*Lettere familiari... op.cit.*)を編集したフォルヘス・ダヴァンツァーティ (Forges Davanzati, Domenico. 1742-1810) もわざわざ註をつけてムロンの著書と誤った指摘をしている (vol. 2, p. 25) ところからすると、真の著者名はナポリではかなり後まで不明のままだったようである。エルベールもまたグルネ・サークルの一員、この『穀物政策論』はブリュマール・ドゥ・ダンジュルの『商業とその他の国力の源泉にかんするフランスとグレート・ブリテンの利点と不利点の考察』の増補第3版(1754年)にも付録として収録されている。

33) ボイアルド (Boiardo, Matteo Naria. ca. 1441-1494) 作、ベルニ (Berni, Francesco. ca. 1497-1535) 編『恋するオルランド』(*Orlando innamorato*) 第38歌2節。原文は以下のとおり：《Chi non è savio, paziente e forte, / lamentisi di sé, non della sorte.》。

(おくだ たかし 甲南大学経済学部助教授)

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 27*

発行所 東京都国立市中 2 - 1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1992年 3 月31日

印刷所 東京都八王子市石川町2951 - 9

三省堂印刷株式会社
